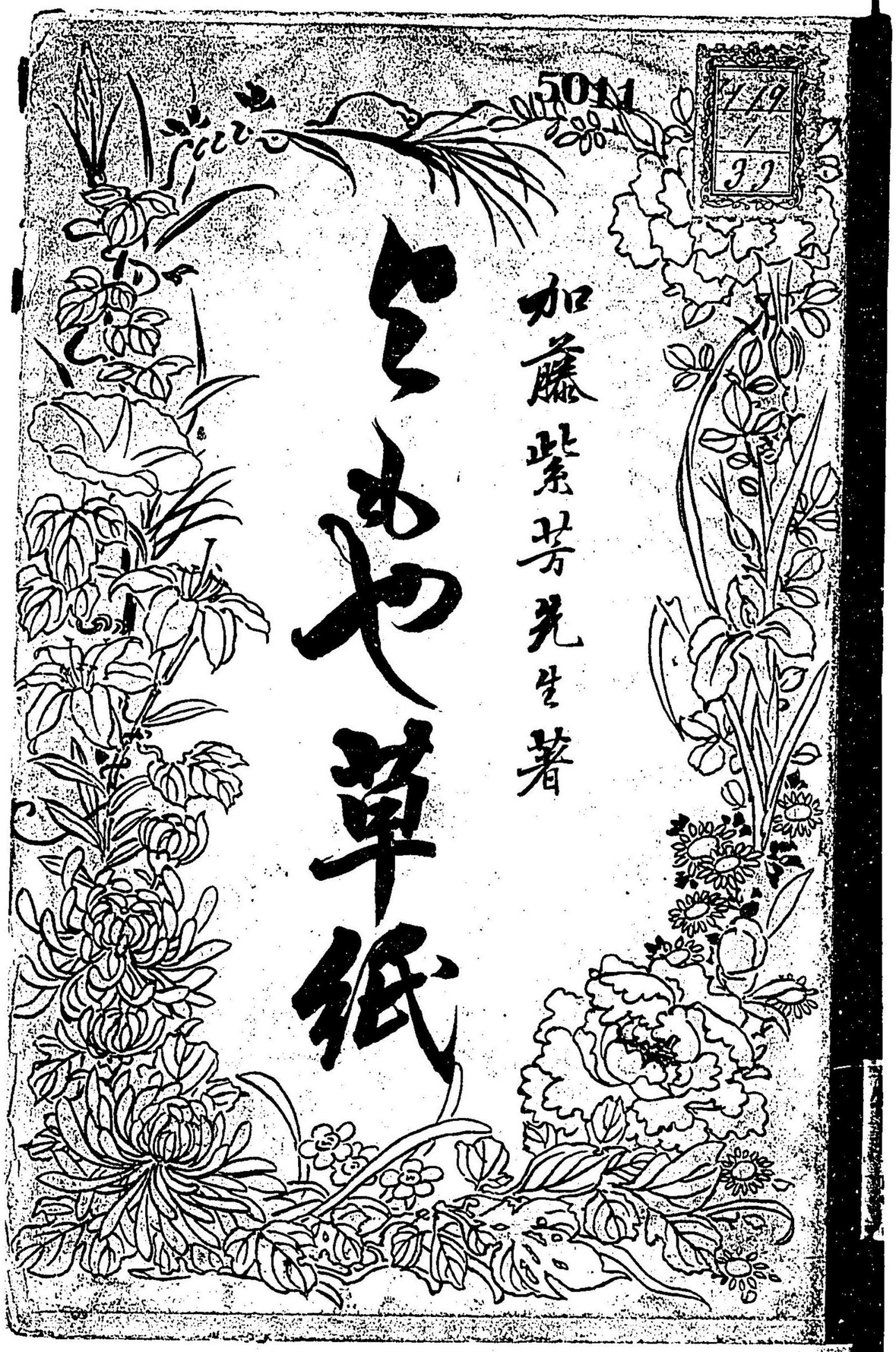


091895−000−7

特11−591

よもや草紙

加藤紫芳／著

M23

DBO−0430

特11
591
No1896/23

東京帝國大學圖書之印

草紙

加藤默芳先生著

東京
金櫻堂

よもや草紙緒言

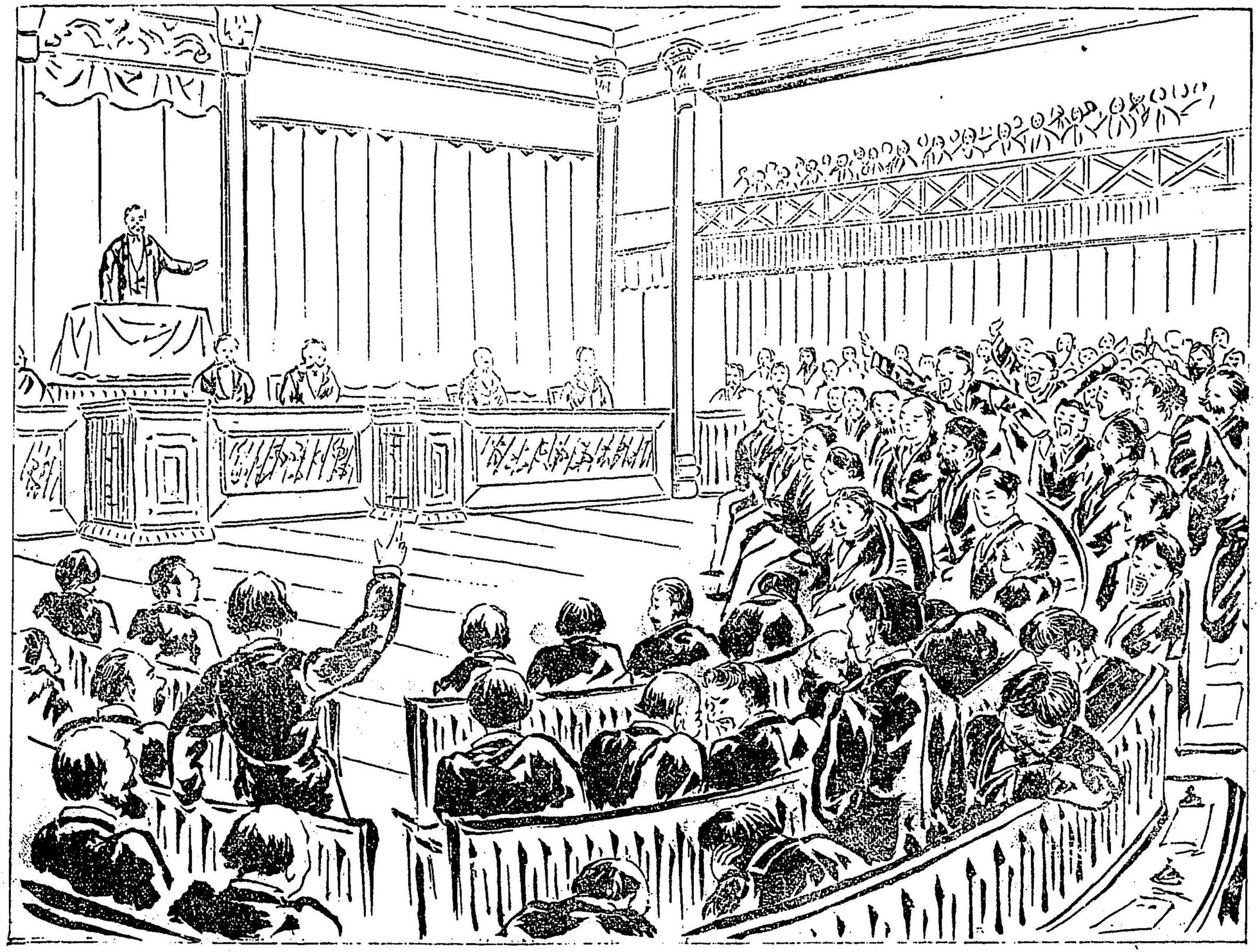
人の世に在るは。提灯なしに闇を歩行く如く。一寸先も知れぬで持た。長道中。滅多に走りて行過たるゝ。及はざるの悔あるとも。果報を寐て待つ時節は非ず。功名手柄ゝ腕次第。優勝劣敗の世の中ぞと。兵糧彈藥の備もなく。裸で道中五錢の罰金。南無三寶失策さと。頭を搔て引込むもあり。牛の歩こゝ遲くとも。悠々緩くして居る内に。外の者に先驅られ。後の祭を悔むもあり。實業にもあれ政事にもあれ。何れ

多少の掛引あれと。詰る處は智惠あり。金があるのに勝を占められ。貧闘引て袋を脊負ふも。提灯なくして闇を走るが故なるべし。左は云へ。明日の天氣の豫報さへ。外れる事あれ〳〵なるよ。五年十年先の事を。いかで見通し得らるべきやと。眞面目よ議論する者い。團子貰ふて彼岸を知り。ドンを聞て晝飯を思ふ後生樂。いつも人の跡に附き。公等碌々たりの冷語を受る連中なりと。無上よ先の先を勘くり。未來を說くの學者。近來頻りよ輩出し。遠く百

餘年の未來記。往々世間よ流布するに至りしは。人智の進歩か。學理の深長か。左りとハ凄ド き世の中や。已學淺く才短く。昨日の事さへ朧氣なるに。未來を說くの腦力なく。且つ理想に依らず空想に依り。小說を作るを非としかから。空想の未來小說。我ながら心中恥しさに。匿名をもてものしさるを。早くも書舗に見露され。足下の「一年後」と「よもや草紙」を繼合せ。梓に上すの計畫あれや。緒言せよとの注文に。我迷惑は兎も角も。よもや草紙の筆者に對し。氣の

辭かりと止めしかど。聞ず顔して再三書を寄せ。緒言の催促辭み難くて。嗚呼がましくも頭巾を脱ぎ。天保子とは假の名。實ハ浪華曾根崎の涙客

明治廿三年二月十一日紀元節　加藤紫芳誌



天保子

第一回

封建の制廢れて置縣の制となりしさへ天保子等の目よりは非常の大變革なるよ地方自治制を施け國會を開けおんと到底なりと高を括り國會請願者ハ阿房の樣よ心得地方自治と説くものは呆氣のやうよ思ひ居たる處へ明治十四年ゆ大詔アラ有難や忝けおや聖明ある我天皇陛下ハ親よ五ヶ條の御誓文を詔らせ給ひ其第一條よ廣く會議を起し萬機公論よ決すべしとの本文よ基き元老院を建て府縣會を設け給ひしさへおか〳〵よ畏き御事おるよ明

治廿三年を期し議員を召し國會を開かせられんとの勅詔を拜讀し誰か感佩せざる者あらんや天保子の如きゝや老込たるが上に元來胸中無文字にして匡中また無一物なるも拘らず十四年の勅詔を拜讀したる際にゝ何にして此有難き聖意に報ひ奉らばやと徐に考按を費したるも無い智恵ゝ到底出ず不本意ながら其まゝに止たり然るに世間に余と同感の人少からぬにや右の大詔後ゝ政事上に目を注る者年一年に増加し先つて憲法發布後ゝ一層活氣を含み寧ろ狂奔するもの、如し此分にて推ば明年衆議院開會の際にゝ定て目覺しき活劇を見るべしと想ひやられて待遠しく且ゝ隱居の身の徒然あるまゝにやをら硯み對ひ今より一年後ゝからも有うかと當さまのよしなし事

うてはかとあく書つくれば怪もうてうもの狂しけれ

今年と相成たり苟も大丈夫たる者一度ゝ代議士に撰擧され衆議院の椅子に座さゞるべからずと十年前國會開設の大詔ありしとき氣付たる處なれど何を云ふにも衆議院の代議士たる資格を得るに少くも一万圓以上の資産がなければ駄目だと思ひ急に金を拵へ始めたがさて金といふやつゝ出來そうで出來ず其癖失すに遣作あく一萬や二萬の金を失くすのは何でもなし併し假令目的だけの金が出來ぬまでも半分位は出來るだらう宜し半分出來ぬまでもよしろ借金するよりゝ宜らうと十四年以來ボッ〳〵溜込んだがまだ〳〵一萬圓に大分問があるぞドリヤ銀行と遞信省へ預てある金を勘定して

見やうかと獨言つゝ手文庫の内より銀行の定期預金證書と遞信省の預金表を取出し元利の殖るを何よりの樂みとして居るゝ金尾爲太といふ男なり元來此の男は士族生まれて學校へも通ひしが書物を見ると目が眩むとて深く學ず東京より親類の者が官員に成て居るを便り其者の世話にて官吏の端くれに列りして別に是といふ伎倆あければ昇進も捗々しからず赤い華表あるけれどもあり祭られて居たが不平にて辭表を出したら一等位上て呉やうも知ぬとの投機が外れ願ひに依り其職を免ずと指令のあるに落膽し知己の人に泣付て或る會社に入り廿圓前後の給料に有付たるも猶滿足せず蛟龍雲雨を得れば也た池中の者に非ず今に見ろとの大見識より貯金心を起せしありとそ

第一回

恒の産なき者は常に心あしと聖人の說給ひしかど灰吹と貯金家に溜るほど汚く金が溜れば溜るほど人情に薄くなり貯金家の眼中に金の外に物あく其極遂に親族知己に疎れ親兄弟の見境なきに至るべし左れば最初は政事家に於る目的にて貯金を始めたる金尾爲太に白痴の一心田も畔もおく只管貯金に熱心したる甲斐ありて少しばかり餘裕の出來たるより日あし貸から叩き上げ家質の流れ込みを繕ひて貸家とし塊末の賣地をせり落しさゝ折見たやうな貸長屋を立て大屋を兼た高利貸勤めが有て思ふやうに催促が出來ぬと會社を引て金貸一方明ても暮ても算盤と睨ッ引新聞紙を買て見た事あければ世間の事に皆無知ず

芝居を見るゝ驕りの沙汰遊廓遊びゝ馬鹿の天邊あの樣よ
牛の乳を飲たらば角が生やうよと無駄な心配夏飲ぬ代り
よと寒中水瓶の氷碎いて氷水の飲置をするもをかし斯る
男よ政事を說き經濟を語るゝ悪皆無益の沙汰あがら普通
選擧の行れざる際よゝ財産の多少よ依り選擧權の有無
を定むるゝ又止を得ざる次第よして一年どう誤ッてか此
男を府會議員よ選擧したる旨區役所より通知あり受書を
差出されよとの事よ迷惑の手を額よ當て選擧したと有ば
出ぬとゝ申さぬが給料ゝ幾らで御座るかとの尋ねよ書記
も呆れ元來議員ゝ名譽職なれば無給料なれど常置委員よ
成給ば冊圓より八十圓までの給料を取ッても排ぬ成規で
ござると答ふれば左らば一寸盤算をお貸下されと八算見

一の上八十圓ならば議員よ出ても割よ合ますから自分ゝ
どうか其常置委員の方へお廻し下されと眞面目で述るに
いよ〳〵呆れ唯今申た八十圓までといふゝ成規のみよて
實際ゝ皆遠慮し冊圓しか取ぬ事よ成て居ます夫も常置委
員よなるよゝうれ〳〵規則が有て誰も彼も成るといふ譯
よゝ參らずと云れ夫あらば早く左樣云て下さればよいよ
何が口惜くて議員あどよ成るものか裁判所へ出ても覺え
があると呟きながら辞表を出して立歸りぬ爾來議員沙汰
ゝ聞くもうるさしと耳を塞ぎて取合ず金を溜る目的ゝ何
處よあるか我ながら忘れて仕舞ひ政黨よ入れと勸める者
あれば夫よ入れば幾ら儲りますと尋ねるよ呆れ二言とい
ふ者あくして止ぬ然るよ世の中の進歩は種油が石油とあ

り瓦斯とあり電氣とありし如く有形的の進歩と連て無形的の進歩止とさあく政事工藝學術とも歐洲直傳の長足進歩今い自治制を施くも早計と非ずと政府は市町村制を發布し市町村民たる者いつまでも中央政府の御厄介と成て居ず自分の尻い自分と拭ふが當然と恰も突出しのおいらんが最初い内所の世話とあり姉女郎の關渉を受たるもおひ〳〵場數をふみ經驗と富し上い内所の手を離れて一人歩行をすると一般なる制度とありたれば心ある者い一大白を擧て此新法を祝したり

第三回

法律規則の新令ある毎と彼是と評論を試みるい政事家の常なるも政事思想のなき凡俗い何の感覺も起ず現在自分の頭へ直接ふふりかゝりし所得税の法令をも區役所の呼出に依り始て承知する等の氣樂人世間と甚だ少からず況て人權の伸縮あど何方へどう轉んでも左まで痛痒を覺えずと政事家の欣喜雀躍する市町村制の發布を聞ても隣で門徒坊主が阿彌陀經讀む程とも思ぬぞ忌々し金尾爲太も其一人と て先年利息制限の出たときい尻と火の付たほど騒ぎしが市町村制の發布と更と頓着せざる處兼て此の男と い同郷の好ある畑泳と云る男がチト譯ありて蔭でい守錢奴と罵りながら舊來の交際を絶ず折々音れいろ〳〵と世間話しをして聞せる爲め僅と世情を窺ふを得るなり一日また畑が來て市町村制發布の事を告げ其大要を語りしと爲太い何時となく感じたる樣子と て太き溜息を吐き

撰擧の日あどを尋ねしがやがて其間際に及び區内の撰擧者へ名刺を配り又ゝ自身奔走などする樣子あれば友達の畑も頼しく思ひ流石ゝ根が士族よて少しゝ文字もある丈よ此度の市制實行よゝ議員となりて政事社會へ顯れる積りと見えると内々此爲太よゝ人知ず恩よ成て居る事あれば周旋顔よて知己の者よ同人の事を頼みしよ夫ゝ飛だ勘違ひ金尾氏よ於てゝ市會議員あどよ成うと云ふ慾望ゝ毛頭あく昨日も拙者方へ來ての話しよ此度の市制よゝ何條とやらよ市會議員よ選擧されたる者ゝ故あく辞する事を得ずとあるよ驚きしとの事よて彼の客嗇家が微の生た羊羹を持て頼みよ來た程だものをと云れて畑も呆れ果て正かよ夫ほどでゝ有るまいと思ッて居たがさて〳〵見下果た根性に成ましたなアと無駄よ周旋したるを悔みたり元來此畑といふゝ立派ある學校の卒業生よて學術才智衆よ勝れおか〳〵問よ合ふ男だけよ我意強く官途を望めば準奏任月俸五十圓位よゝ有付れたものを五斗米の爲お腕を枉げ長官のお機嫌の塵を拂ふて大丈夫たる者の屑しとする處よ非ずと民間よ在て紳士を氣取りいつも交際よ追倒され黒塗の人力車よ定紋を付け車夫を抱へ置きて乘廻はすゝよけれど其給金さへ拂れぬ程の大困難左れど政事家たる者がポク〳〵歩行いたり下等瀛車よ乘るやうでゝ見識が下ると我慢して表を張る其苦しさ最初ゝ一度演説會よ出席すれば十圓内外の立前よ成て大きよ息を吐たがおひ〳〵同種類の者が殖て安賣りを始め但し婦人よ限り傍聽

無料位でいなか〳〵聽衆が來ず廣い演説場よお婆さんの齒並のやうな入りでい折角の名説も喝采少きよ我を折り入費持出しの接待演説よすれば聽衆い割るほどよ群集し演壇よ上らぬ先からヒヤ〳〵ノウ〳〵の聲姦しく拍手喝采の中よ演説を了り樂屋へ退き考一考すれば小髮から汗を流し一生懸命演説したる骨折いコップの水の泡よして一文も懷中へは入らぬ上へ其日の席料は辨士一同頭割りアヽ政事家よい何がおるさていい詰らぬ目よ合たりと呟きおから身錢を出して歸る事も度々なり

第四回

人の慾望い果して何れの處よあるか目的よ從て棹の差引楫の取方種々ありて必ずしも十人が十人同じ方角よ向ふ者よあらず然るよ無智短才の痴漢共い我向く方と上乘として已と向を違ふ者い馬鹿と罵り呆氣と嘲り左ながら雖敵の如く心得るもありけり是併しながら大きゐはき違よて一寸の虫よも五分の魂入よいれ〳〵嗜好ありて上戸い正宗よ現を扱せど下戸い牡丹餅大福ほどよ思ず左れば政事よ意を注ぐ者は世の中に政事談ほど面白く必要おるいおしと婚禮の席葬式の場何處でも構ず政事の論議ありが佛尊しの理合止を得ずと雖も色を賣り藝を販ぐ藝娼妓よ向て國會の講釋オヤ馬鹿らしいと鼻の先で待遇るゝい人を見て法を說くを知ぬ弱輩の罪よして百日の說法何一つの直打なきこゝ氣の毒あれ是等の輩を文學者若くは實業家の目より觀察する時い兒戲よ類する業くれよして條約

改正が何參らうと斯參らうと斷行の中丘のと騒ぐ連中の頭へゝ餘り影響ゝ及ず國家の經濟を論じる手間で下宿屋の拂を濟せたが順で有うと岡目よゝ笑止よ思へど夫等の瑣事ゝ大丈夫の懸念する處に非ず大功は細謹を顧みず普天の下唯一人の關白職よ上りし大閤秀吉も松下嘉平次の鎧代を持逃したる適例あるを知ずやとの落付顔苟くも政事家たる者が手習などする暇があるものか書ゝ姓名を記すよ足ると我姓名さへ書ぬをお手拭顔よ誇り此男少年政談演説會の壇上よ上り余ゝ國家の爲よゝ生命を擲ち財産を抛つべしと放言したるゝ勇しけれど生命ゝ兎よ角抛つ財産ゝと問れなばおいもじるがら達摩大師と同宗よて本來無一物と答へざるを得ざるべしかゝる輩が何ほど狂奔

したればとて何の利益があるべきぞ然るを堂々たる政事家が此等の青年輩を唆かし可惜勉强盛よ廢學するの不利益を諭さず却ッて手を引き腰を押共よ奈落よ連行んとせらるゝゝ何ぼう不深切の事よて候と老輩の落涙するも理りかしと左れど退いて政事家の心事を察するよ何ば義經韓信の如き名將よても大將のみよて戰ゝ出來す士大將士分雜兵陣笠連の餓鬼も人數枯木も山の賑しよて殊更公議輿論よ勝を制する今日の有樣權兵衛も來い八兵衛も呼べ日當三十錢づゝ遣すぞ難有く頂戴せいと烏合の勢よ僞勢を張ど心よ成て走奔するゝ一人か二人夫も愛國といふ龍頭の兜を戴き忠君の鎧草摺長よ着なして陣頭よ臨む御大將の中よゝ畏多くも崇德上皇の御味方よ參りた惡左府流

の不平將軍の在するや何よ今や世ハ太平無事よして大砲ハ正午を報じ小銃ハ鳥を打つの外用なきも政事上の戰爭ハ日一日よ活潑とあり法律の許す限りハ飽まで競爭を試み熱心よ奔走するころ臣氏たる者の本分あれいでや此政事社會よ馬を乘出で功名手柄ハ器量次第時機よ後れて後悔すあと勇しくも唯一騎敵か味方か彼誰星きらめく中へ乘出しハ今日初陣の若武者ある山犬九郎といふ者なり

第五回

西洋の政事家よ貧乏ハ少く政略を利用して金儲を企て鼻の下を養ふの卑劣心あるハ稀なるが故よ其主張する處の討論も自ら偏頗なく公明正大ある者多しと云へり然るよ我國民間の政事社會ハ未だ幼稚よして眞正の政事家少く動

もすれば政事論を利用して身を立んとの利己主義を抱き甚だしきは喰稼のデモ政事家ありて徒よ暴論を吐き社會を騷がする者なしと云ふを得ず前回よ現れたる山犬九郎の如きは其一人のよし父ハ士族の喰詰よて一生貧乏して果たれば其子よ文學を敎育するの餘地なく僅ふ小學料の前期即ち尋常科を卒たるのみ手紙の文さへ滿足よ書ねど東京へ行たらバ何か成るだらうと七處借よて旅費を拵へ出京したは一兩年前何處か奉公口は有るまいかと知己よ縋り慶庵よ頼みいろ〳〵と氣をもめとも百の馬は何處でも百無藝徒食の役よ立ずを給金出して抱へる茶人更よあけれバ無念あから知人の食客長鋏歸んあんの大歎息三杯目よハソッと出し骨拔生勞のみの食でハ到底榮養不足よて

よい智恵も出ざれバと急に勇氣をふり起し出せば出る氣で五杯食し是れより無上に強くなりランプ掃除と樣側の雜巾掛のみにてハ百万年經つともウダツの上る瀬ハなしと一日半日の間を得て傍聽無料の演説を聞に行たるに辨士ハ聽衆の多きに勢ひを得て蟹の如く泡を吹おがら辨舌の支へる度にコップの水をガブ〳〵飲でテレ隱しにするハよいが彼の樣に水を飲だら腹が下らうと人の頭痛を痛氣にやむ傍聽人も有たり九郎ハ此演説を聞きひどく愉快ある事に思ひ己も一番政家事とあり演壇に上りて喝采を得たしとの大望を起し夜店で買た雄辨大家論集さてハ演説獨稽古おどいふをポツ〳〵讀始めたるが不學の悲しさハ辨慶がおゝぎなたをふりまはしとへやゝ處へ句讀を切

るゆゑ何の事やら少しも分らず是にハ殆ど當惑したるが待バ海路の日和とやら斯樣な役に立ずも時世に遭ば用ひられ演説が分ッても分いでも其樣な事にハ頓着せず辨士が演壇へ上るを見たらばノウ〳〵と喝り續けよかしと甚だ容易き用向を引受け日當貰ッて演説の傍聽是ほど割のよい商賣オット職業ハ有るまいと當人甚だ恐悦にてノウ〳〵役に狩取られ出席する事度々ありしが勸學院の雀ハ蒙求を噂るとやら習うより馴よとて親方の樂屋入に衣裝を擂いで供をした男も數年の功にて中上ます位ハ勤めらるゝと同格にて後にハ聽衆お集りの間の繋ぎに上顯と下顯のぶつかり次第有ふれたる演説で壇上を塞げるまでに進歩したり左れど一升徳利ハ一升しか入らずいかほど當

人の骨を折ても聽衆をして感服させる程の説の一つも出ず聽衆の半疊嚴しきよ憤然とあるを夫ほど諸君が僕の説をけあすあら此處へ上ッて演説して見たまへ傍で見るやうあ樂なものでの御座らぬから、ナニ此處へ上ッて演説しろと辨士馬鹿を云ふあ自分よ演説が出來るほどあら聽よの來あいワイ

第六回

戰爭よ軍略商法よ掛引總て何事よ依ず權謀といふ事なくて協ず殊よ當世の政事家たる者よ最も必要あるの政略ありあんぼ現金掛直あしの正札付が流行れバとて百のものを百よ賣るやうでのなか〳〵此の世智辛い世の渡られず或る人の金側金鎖の時計ヂャヤン入の指輪等のチャーム

の具よ過ずと雖も此等の深く研究せざるの説よして決してチャームのみよ限らず政事家の白痴嘲しよの最も必要の具なり何となれバグラットストオン、ブーランジエーの如き政事家と雖も其名を知ぬ初對面の人よ對ひ拙者のグラットストオンでは座るブーランジエーでは座ると云た處がへて成程と云た限り感服せず宜しまた兼て其名望を幕ひ居る者よても衣の腕袖の醤油で煮しめたるヘコ帶を猫じやらしよしめたる扮打等を見ての幾分が信心も薄らぐよ相違あし左れば此白痴嘲といふ事政事家の須臾も忘るべからざる事よして奢に裝飾の上のみあらず言語擧動等都て注意し假よも馬脚を顯はし買被りの歎を發せしむべからず畑泳の如きの最も此点よ熱心し學校を出て政治

社會に入し以來常に此秘訣を守り苟の訪問にも一萬度の
お札箱ほどの名札を出し二三日の旅行も二號文字で新聞
に廣告するなど人の知ぬ無駄錢を捨る事少からず左れど
少し眼ある者い其虚喝を笑ひあんの彼奴が嘴の黄色い癖
に畑が經驗淺くして畠水煉の空論多きを侮どりて取合
ぬよいよ〳〵憤然となり彼奴等天保時代の老耄め何程の
事やあると齒切をすれど新前の悲さ投票選擧とか多數決
とかいふ場合にいつも先輩の爲に勝を制され恨みを呑
で服從する事しば〳〵あり取分財産上の爭ひにい一歩も
二歩も讓らねば成ぬを口惜く思ひ財産選擧の不公平なる
を常に稱道し國會議院の選擧い普通選擧とし權兵術も八
兵衛も選擧權の有る事にするが公平ありとの說を主張し

たるがいよ〳〵憲法の發布と共に議院法の出しを見れば
悲しや選擧被選擧とも直稅國稅十五圓以上を納むる者に
非ざれば其權なく我平常の持論い茲に至り全く水泡に歸
したるに落膽し早速金尾爲太方へ駈付け時に僕い兼て貴
君より地所の所有權を借用し表面い十圓以上地稅を納る
事にして府會の選擧權を爭ひ改選またい補欠選擧のある
毎に隨分奔走して爭へども不幸にして未だ其時機至らず
實て市會議員にでもと思ッたが是また望人が多く國會へ
出る下稽古かた〳〵議員を熱望したる向もありし爲め又
ぞろ當事と越中守い向ふから外れ大いに失望致したり併
し是等い一地方若くば一局部の小議會にて左まで熱望す
べきに非ず特り國會議院こうと待設けしに何ぞ計らん其

被選擧權は十五圓以上の直税を納むるものゝ限られしと
ゝりて今日上ったゝ外でも無し其直税一件だがなんと
今五圓增税の出せるだけ何か地所を貸してゝ貰へまいか
其代り僕がいよ〳〵選擧が始り多數人民の望を得て議員
に擧らるゝに於てゝ八百圓といふ年俸に有付く譯だから
左すればまた幾らか君の方へも益を付るからとゝ流石オ
物とて如才なき云廻しあり

第七回

戰爭よりもあれ商法よりもあれ總て世の中の運動を支配する
最も重なる要素ゝ金なり金あくば何の已が政事かな學問
が有うが才智が有うが金がなくてゝ話しにならず歐米の
文明國人が只管拜金宗を奉じ其極遂に倫理に戻り德義に

背くの弊を生ずるもまた止を得ざる次第といふべし然る
に我國ゝ子曰の儒教主義を以て腦髓を充し道に遵たるを
拾ずおどいふ痩我慢から富者を賤みて守錢奴と罵り彼奴
ゝいやゝ金持顏して氣障だ己れかう見えても宵越の錢ゝ
持た事がないと貧乏あるを自慢して儒者畫師武士などゝ
金持あるゝ少なかりしかゝる弊習多き親父が家督を相續
したる明治世界の息子どのおれば猶幾分か其弊を襲ひ
貧乏書生の稱號を甘んじたる昔の書生今の紳士畑泳の必
轉ゝ政治社會に名高く或る新聞紙ゝ芝居道の元帥森田勘
彌に借金博士の稱號を負せしかど借金博士たる者特り勘
彌のみに限らんや畑の如も未だ博士とまでゝ至らずも借
金學士位の直打ゝ充分にあるあり然るに感心にも此大借

を脊負て重たがらず依然として抱車に乘フロックコートと高帽子絹ハンケチまて鰌髭を拭ひゴルデンとか云る卷烟草をパク〳〵吹し烟突然たる隆準をいからし政事談まて持切るも畢竟金尾爲太と云る後楯ありて畑の器量と見込無抵當まて金を用立るが故なり今日も大方其樣な用談ならんと餘り氣を入てハ聞ずフン成ほど而て成ほどと半上の空で聞居たるに八百圓の年俸といふまて至り始めて爲太の皷膜まて感じナニ八百圓……總理大臣と同じ月給……オット遽てるべからず月給でハ無い年俸だと云れて少し失望の体まて年俸でハ幾らでも無いコーット八を十二で割ると六が六、二六十二引く月六十六圓餘まて成る立寄れば大樹の下とハよく云たものだ同じ議會でも市會ハ無代府會

の常置委員ハ月俸卅圓然るまて國會ハ役付でもおい平の議員に八百圓の年俸とハ大した氣張方だ併し夫れは誰が出しますエ誰がッて國會自らが支出するのサ國會は政府の會計豫算を議する權が有て云ハ來年の入用は是だけ掛るが人民まて於て苦情ハあるまいあと相談を掛られるやうなものだ〳〵イ成ほど夫ぢや國會まて世間が不景氣まて可笑くおいと思へハ其豫算を幾らか減じると云ふものか但しハ全で廢案にして取込んだ諸税を蔵へ仕舞込み五兩一分で貸出す事も出來るだらう五兩一分……エ、途方も無い何千万圓といふ金を五兩一分などで貸課せるものか馬鹿〳〵しい君ハもッと理屈の分る人だと思ッて居たら案外だあァ夫だから僕が云ない事ぢやおい其樣おまへ金ばかり

溜て居らずチト夜學校へでも通ひホーセットの經濟學で
も讀み給へ少しの事理が分るからと勸めたよ聞ぬからだ
と云れ爲太は心中よ少し恥たらうと思ひの外平氣な顏よ
て書物あんぞ讀むやうな事で金が出來るものか

第八回

或る經濟學者い世間よ殖産の業多しと雖も貸金株金等よ
り生ずる益金ほど純粹の利益いあしと云り成ほど商業と
云ひ工業と云ひ何れも多少資本を下し何なる手堅き業よ
從事するも幾分か冗費の生ぜざるものなく假令ば資本あ
しよて月給を取る官員よても身分相應の形を造り交際も
せねば成ず車馬よも乘り新聞紙も買ざるを得さるが如く
月給の全部を懐よするい到底あし難きを見ても其說の誤

らざるを知り得べきあり然るよ世間よい醉狂人數多あり
て月給も取れず役儲もあき議員委員とありて無い金を遣
ひ楽て貴重の時日を費して惜ざるい偏よ名譽と云る二字
を重んじ尊ぶが故あり人よして名譽を楽んか悪衣悪食も
耻るよ足ず功名手柄も誘るに足ざるべし抑も名譽を重じ
之を敬愛するい人士の本分よして進んでい之れを輝さん
事を思ひ退いていい之を失いん事を怖る積極的の名譽い之
を得る能ざるも消極的の名譽い之を守らざるべからず左
るを利よ走る者名に荒む者互に極端よ走り一い名譽を輕
んずる事塵埃の如く他い名譽を重んずる事九鼎のごとし
是おん金尾爲太畑泳の言行よ適切し互い相背きて氷炭容
られざるものに似り是れ却ッて兩人が交際を親密ならし

むる原因よりして若し此二人が同じ方向を取り互よ其名を爭ひ其利を競ふよ於てゝ自然其間よ軋轢起り嫉妬羨望の念共よ止む能はず其極言行よ現れ義絶するの不幸に陥るやも計り難し然るよ爲太ゝ利を爭ふよ汲々として名を求むるの心あく泳ゝ名を求むるよ孜々として利を顧みるの暇あく各其志す方よ向ひしが今や社會の風潮ゝ漸く上進し政事文藝其他とも著しく進歩し頑固舊弊を墨守するゝ策の得たるものよ非ざるのみならず已之を守らんとするも他よ邪見ある刺激者ありて之を度外よ附せず強て言張るに於て己取て代んず勢ひよて肉迫するを何んせん常よゝ算盤の外手よ取るべき物よ非ずとし信友畑の忠告も斥けて顧みさりし爲太が急よ心を飜へし先づ市町村制俗解あ

といふ手近のものより取て掛り假名を當よ讀始めたるゝも何ある譯かと聞くよ爲太の學力よも及ざる程あ無學文盲ある少年輩が社會に横行し勸告と號して身拵よき人の家よ推參し承れば貴公い國會議員とおるべき財産の實格ゝ充分よ有さるゝ由あるよ何ゆゑ被選擧を爭ひ給ぬやかくいふ某あどゝ所得と申てゝ晩よ入る湯錢さへ怪く學問ゝ新聞の論説も讀兼れど國家の大事よゝ易へ難しと寢食を忘れて奔走致し居るゝあ手前あどゝ支那でポヤの有た程よも感ぜず算盤と首引をして御座るゝ苦ゃしき次第よて寧ろ國家よ不忠なる人と云おければ成ません若自身が議員よあるを好み給ずば責てゝ選擧する議員よなりと注意し徒らよ大法螺を吹立て無學無經驗よして八百圓

の年俸を目を呉れる不都合な輩が選ばれて出ぬやう防禦をして貰ねば成ぬと頼れもせぬ事を我身の上に落掛ッた利害の如く設立れど更に取合ふ氣色なく其事なら畑といふ者に委細任せてあると云せも果ず聲を勵しソレうてがお手前の狼狽て御座る處だ畑に畑の了簡があるものを人に任せて置いてうもやそも濟むべきかお返辭次第で了簡ありと腕まくりして詰寄りぬ

第九回

金尾いとんだ獣に舞込まれたりと心中に驚きあがら左あらぬ体にて威儀を作り成ほどコリヤ其方のが理屈ぢや畑に任せて置くいよく無いが左りとて手前い金貸が渡世に随分忙しければ家業を投ておいて議員選擧などに奔走い出來ず見れば手前い書生風にて別段定職もなひ御樣子幸ひ手前方に利子の取集め又い區役所登記所等へ出る者の無くて困ッて居るが何と手前方へ雇はれてい下さるまいか左すれば三食の外に某づゝか小使錢を差上げ演説い勿論寄席位い聞に行れるからと按外なる甘い相談に少年い急に腕卷りをやめ居三昧を直し何を隱さう自分い今の勉强盛りにとんお狂人じみた事を云て跳廻りたくい無いが官途に就きたくも學力おく商法をしたくも資本の無い苦し紛れ愛國といふ假面を被り新聞紙の拾ひ讀み演説の聞囓りで痴漢を嚇し自黨を募る權謀家の尻馬に乗り辨當代に遊説して廻れど何處でも餘りよい顔いせず中に眞に發狂と心得巡査に引渡すなどと喝られた事も度々

ありしが中よりまた若いよ似合ずに熱心の儀感服せり幸ひ時刻なれば食事をしてお出よ成たが宜い抔と優待する間もあり是等い我々をお先よ使ひ自黨よ勢力を付やうと か一身上の都合を謀らうとかいふ野心のある者とい愚味の我等よも見えすけども喝って追立られるから見ると逢よ勝る我黨の人なりと密よ悦び居たるよ夫にも勝る貴君の仁惠數ならぬ拙者を給料出してお抱へ下さらうとい千萬忝けなき仕合なりと此時始めて懐中より新聞紙の截屑よ摺た名刺を取出し鉛筆よて機械的に住所を書添へ示したるを見れば山犬九郎なりハテお手前が九郎どのでお座るか拙者も矢張御同縣よて舊藩主よ仕へ久しく御城下よ住ひなし御親父山犬帆右衛門さまよいろ〳〵お世話よ成

ましたがお蔭で今い當區内にて二等所得税を納める株とありましたといふよ九郎も始めて逢た男あれど同郷者ときけば何處やら懐しく且つ自分と同じやうな連中が一雨でとよ殖ゑ一人でも餘計よ勸告して自黨よ引入れ御大將が感賞よ預らんと勸告競爭の氣味にて少し家臺骨が確乎して居て公民簿よ姓名のある者の家へい毎日幾人とおく勸告者が推參し中にい勸告者の振をして蝙蝠傘駒下駄おを持て行くまやかし者もありて大きよ難澁の折柄あれば常よい一文錢よ生爪を剝す金尾爲太が大英斷よて九郎を抱へしも類を以て類を防く苦肉の計畧よて肯盛りの大男を一人無駄飯を喰せ小使錢まで宛合ふい驕りの沙汰よて引合ぬやうなれど算盤置て損得を考ふれば金を貸すと

き區役所へ行き債主の地所建物などの有無印鑑の實否等を調べよやるにゝ丁度適當の人物あるうへ勸告者が幾人も來てグト〳〵うるさく迫るを追拂はせるよし至極都合よく同人を抱へた後ゝ主人よ代り嚴しく勸告者を退治るが故よ忽ち應接の無駄が省けとんだ便利ある男を雇ひ當たるを悦びぬ

第十回

虛榮ゝ實益に及すの語を肝よ銘じ造次顚沛忘れざりし金尾爲太も數十年の困苦よ依り稍其目的を達し金滿家樣の内よ數へられる事よありしゝ滿足あがら人身の快樂ゝ特り黄白のみよ止らず金を山よ積でも得難きゝ名譽あり世間よゝ献納金の廉を以て位記を贈りしを上もあき名譽と

心得るもあれど是ゝた深く誇るよ足ずと今ゝ漸く隴を得て蜀を望むの氣色顯れ少壯の頃より只管利慾よ眼眩み學問の心掛薄かりしを悔めど早不惑の上を二つ三つ腰てろ曲らぬ初老の年輩となり日暮道遠きを歎ずるのみ然し世間の識者が云ふ處よ據ば日本人ゝ兎角よ老衰を急ぎ未だ稼ぎ盛りの身を以て早く已よ身代を悴よ讓り隱居あどする者多けれど西洋の有爲家よ較ぶれば五十六十ゝ未だ壯年の部あるよし左すれば我々ゝ未だ壯年よも至らず三十四十ゝ子供よて十九廿歳ゝ赤兒なるべし其赤兒上りの青年でありあがら今から初老あどと老人がるゝ我あがら引込思案の甚だしき者なりいでや廿二三の壯年と若返り今一旗上るも遲からずとゝよ始めて發心したゝ既よ憲法

發布の後一年餘りを過ぎ衆議院の議員選擧會近きよ開かんとするの頃なりき畑泳ハ之を知ず其前爲太よ對ひ五圓の直稅增加一件を談じたる處快よく承引き呉しよ安堵しいよ〳〵府下よて選擧を爭ふ事よ決したるも猶心配ある

ハ競爭者多數の一事なり府下ハ地方と違ひ有力者輻輳し居れば平常は博議多才を以て自ら負みしも未だ全勝を占むべき確乎たる目的ハ立ず所詮かゝる役者揃の槍舞臺よ於て苦戰を試るより寧ろ郷里よ赴き被選擧權の資格を備へ置くよ如ずと爲太よハ内々よて更よ郷里よも表面だけの資格を造りさて競爭者ハと聞ば何れも昔氣質の百性よて議員よ選れよ身上を潰さねば成ぬやうよ心得て怖しがッて居る者のみあれば爭ふまでもなく選擧とあれば

此方へ落るハ必定と棚よ牡丹餅を仕舞ひ置たる方確なる事よ思ひ居たるよ其後聞けば自分が兼て世話を受る金尾を爲太も同じ郡部よ被選擧權がありて内々議員を望み居るとの事よ偖ハ左樣かと始めて爲太が反旗を飜したるを知り外の競爭者あらぬ一も二も無く踏躪り勝を收るハ政事界の習ひなれど恩儀深き爲太が競爭者と聞てハ勢ひ爭ふ事あらず爰ハ一番肝膽を碎き篤と去就を吟味せねば成らぬ處ありと流石の泳も額よ手を當しが兎ても角ても此上ハ爲太よ會て其心事を委く聞き其上よていよ〳〵世間で云ふ如く爲太よ野心あるよ於てハ篤と其利害を說きお爲どかしよ說伏て思ひ止らすが上策なり併し彼若固執して反旗判然たるときは不便ながら一刀兩斷の策よ出で數年

來の交際も恩義も全く打棄て敵味方に分れ競爭場裡に相見えるの外なしと決心し頓て爲太に面會の上得意の實利主義を樂て虛榮を爭ふの策の得たるものに非ざる事を懇々說きたれども爲太に於ては固く執て動ず君が左樣に熱心に說かるゝは畢竟鄉里の選擧を氣遣ての事あらんが夫あらば決して懸念に及ばず勝つと負るゝ時の運銘銘の腕にあれば勝たりとて誇るべからず負たりとて怨むべからずと內兒を見すかしての云分に泳ぐ返す言辭あく指を咽へて引込たり

第十一回

爲太がかく反旗を翻へしたるゝ勸告者防禦の爲め雇ひ入れたる山犬九郎の刺衝預りて力ありと雖ども社會の風潮其半に居り且つ府會市會等に選れて出る人物を見るに左まで爲太の器量と甲乙おきぬ目出度議員もありて發議發論ゝ稀にして議場の旗色を窺ひ起立に正鵠を得る事にのみ注意するもあり甚だしきゝ議場の事ゝ兎に角何が愉快と云たつて府廳の玄關へ車を着させ受付に辭儀させる位愉快な事ゝないと夫ばかりを樂しみに議員に出て居た先生も昔々あつたとやら風の便りに聞居れば乃公だつて議員位に成れぬ事ゝ有るまい議員に成ばッレ、ナ八百圓といふ附屬物があれば名と利の兩點張にて議員志願と出掛たるこそ賴しけれ九郎ゝ此內心を知ねど畑泳めがをりく來て我外に政事家ゝあきやうな大法螺を吹立てるが忌々しさに主人爲太を煽動し畑と同じ郡部に被選擧の資

稽がある幸ひ爲太を選出せしめ畑よ鼻を明せんと謀計居たり去程よ畑い又温言を以て爲太を説たれど聞入ぬ上い是非よ及ばず東京の選擧よい漏るとも爲太を潰し已是非とも議員よ成んと是より急よ縣地へ赴き舊誼を温むるを名とし古朋輩を片端から尋ね夫とおく身味よ付る所存ありしが生憎畑の友人よは選擧權のある者少く何れも判と云て任のおい程なぺイ〳〵官吏三百代言の眞似をして世を渡る零落士族のみあれば是等の輩を何百人手馴付たりとてイザ選擧といふ時い何の役よも立ずプモンストレーションを催したくも日當でもやらねば出る者はおいよ落膽し此上は政談よも有れ學術よもあれ舌の縦く丈演説を爲し我器量の用ふべきを示すの外あしと幾度とおく演説會を催し全体あらば其後よて懇親會を開き郡内の重なる人々を馳走するが本意あれど根が付燒の俄紳士の悲しさ演説會を催す入費まで利の出る金で間よ合せる位の始末なれば馳走までい手が届ぬを遺憾よ思へり加之あらず該縣地は人智の度甚はだ低く説の善惡は其人物の位置如何よ依りて判定するの有樣あれば泳の千言万語より某伯某三位とか云ふ人がグツ〳〵と陳べる二三語の方遙よ利目あり其以前某伯が該地を漫遊の砌一場の演説を催し今の時は宜く小異を棄て云々と説れしより郡民擧ッて其説よ風靡し泳の演説よは餘り耳を傾けず兎角人望の思しからぬを不本意に思へどさて他よ好手段もあければ成べく勉て安めを貶り五斗米に屈せざる膝もこゝでい七重

八重よ折り長者を迎へ信用を得る事のみよ熟心せり夫よ引替へ爲太は遷擧間際まで一度も縣地よ行ず畑が熟心の餘り縣地よて辻後架よ我名を記したる被選擧志願の引札を貼て廻りしを巡査よ認められ違警罪の處分を受けたる由を縣地より出京したる者よ聞き彼奴がうんあよ熟心で い此方でも何とか手を盡さずば成るまいと九郎を呼んで相談すればなアよ彼奴が幾らジタバタ騒いても群民の多數は黨派が違ふから大丈夫併し此方もまた郡民と同派といふ譯でありあく改進でも自由でも自治でも保守でもあいから此點よ付てい少し注意して貰ぬと不都合だが貴方れどの黨派がよいか何でも好あのをお撰りあさい

サア八兵衛どんすッと此方へ詰さッしやいこれいこれい誰かと思へば源右衛門どのでは座ッたか此中はのら仕事が忙しさよ無沙汰ア した相變ず健康でようでざるのうイヤ手前どもい身体が達者といふのみで何の役にも立ずさねど此方の爲太どんい强勢あるものじやあア八兵衛どんが云しやる通り爲太どのい士族上りの金貸よて慈悲い微塵も知ぬお人と村の衆の噂い大違ひ此村よ質流れの地所がホンの少しばかりあるといふ丈の縁で此樣よ馴染もあい私共を呼でたび〳〵の馳走どんと合點が行ませぬあア檀那寺喰せて置てさてと云とやらいふ川柳が俺座るげなが期樣よ手厚い馳走に成るもよいが後が按じられますと村の爺さま連中が不審がるも道理爲太といふ男い貸した金

が出來ずば鬼の腕でもへシ折て持行き兼ぬ强慾者ありしよ打て變ッた此大氣これは仔細のある事と内々樣子を聞糺せば是又爲太が願問と賴む山犬九郎の差金よて畑泳と選擧を爭ふよゝ到底金をまくの外あし金さへまけば勝利ゝ必定と聞て爲太ゝ途胴を吐きしが兎よ角八百圓の年俸さへ取れば少し位の散財ゝ搏ず併しいよ〳〵左樣と事が極ッた以上ゝ何とか我主義を極ずゝ成るまいが何の黨派が一番儲りさうだらうと地金を出すに九郎ゝ呆れ兼てヤす通り政治家ゝ素盧榮よて金儲をする爲にあらねば何の黨派よ入るとも決して金は儲らず併し假令儲らぬまでも散財の海い厚いゝ多少あるから若し財散の海きを望み給はゞ自治派おどが宜しからん御承知の通り自治伯ゝ兼て

フーシヘーミングとヤして小農を棄て大農を起す方國家よ利益有べしとの經濟說を主張し大百姓を說ておひ〳〵配下の内よ組入れ山林原野の不毛地よ桑茶を植ゑ付け家畜を飼養しお初穗ほどお山林稅を納め豐田沃野よ勝る收納を得んとの大趣意あるよしなれば自と黨員も大百姓多く品よ依ば錢儲が出來やうも知ぬといへば夫こそ我望む黨派おれ彼是云ず入黨をヤ込で下されと勇み進んで加盟せり左れど其儲口は跡廻となし差當ッての急務ゝ縣地よ立越し金の威光で競爭者を押倒すが肝要と九郎を連て出張しいろ〳〵よ名を付け縣地の重ある地主連中を饗應し御馳走の食飽をさせたり内證知ぬ百姓共ゝ祖父の代から上ッた事のない上等料理屋へ招かれ巾廣の階子段をおう

る〳〵上れば樓上よゝ何百人前といふ膳が並んで居て絹布の座蒲團よ座らせられ足のアカギレが引掛るさへ窮屈あるよ海鼠の爲め打寄られたかと思ふ程よ別品が押寄せお酌々〳〵と徳利をさしつけられる苦しさコレ無益ェこくお己はア酒ゝ飲ましねェと最初ゝ遠慮して差扣ゆれどおひ〳〵毒が廻り目がオットリして來ると居三昧が崩れサア田五十一杯やらッし例のドブロクとゝ格別よ利がゑい

そ此昆布の甘い事ゝと頬張るよ藝妓ゝ吹出し貴方外聞の悪い事を云ふもんぢやありませんドブロクみんて而して夫ゝ昆布でゝなくきざみ鯣ですよと云て居る處へお茶屋の女中が最初出た吸物椀と引替よ茶碗を置て行たを八兵衛ゝ飯だんべェと蓋を取りやァおへない事をした已が處へゝ鯛の頭が入ッて來た

第十三回

芋の養たを御存じあるのみ鹽のあい鮪よゝ母の体内を出し以來一度も出會た事の無いといふ自然の節儉家全体藝妓あどいふ者ゝ何の爲よ座數へ顯れるかと首を捻る朴訥者此席上よ充滿し何で招かれたのか皆無分らねど喰ぬゝ損ぢや飲ぬゝ損ぢやと本所の五百羅漢を見るやうな形相よて肴を暴す凄じさ折を持出す世話があくて宜けれど食傷でもせねばよいがと氣遣しきまでよ喰盡し猶も茶碗むしのお代りがしたいとゝ驚き入た客人と女中が舌を卷し道理ぞかし左れど此人々も多少の神經ゝあるよやロク〳〵も知ぬ私等を此樣よ馳走して唯歸す氣遣なし最う

何とか云だらうと何れも待顔の處へ金尾爲太ハ着馴ぬ洋服よ肩の張るを堪へ金鎖付の時計を目ゞゆきまで胸に光らせ指よも同じく寶石入の輪をはめ香水の馨り馥郁と四邊の鼻を穿ち悠然として席の中央よ立ち今日諸君をお招き申したるも別よ是といふ仔細ハあく唯お近付の爲のみあれば何ハあくとも緩りとお上り下さるやうよと陳たる限り六かしき注文ハなく其上お歸りのお土産よと廿五六錢もする絹ハンケチを一枚づゝ引たるよいよ〳〵魂消爲太ハ客畜だ守錢奴だと平常譏りぬいた者までが是ハと我を折り流石ハ東京の人だけよ田舎の客畜とハ質が違ふと感服して物語りぬ斯て爲太ハ其翌日手家の山犬九郎へ禮廻りと號して前夜の來客方を一々廻らせ其の節始めて爲

太が衆議院の代議士よ出たき望みのある由をほのめかさせ且つ爲太が近日當地の寺よて政談演説を催すよつき其節ハ何か聽聞に來て呉との旨を云ひ入れやがて其筋へ届け演題を新聞紙よ廣告したり然るよ爲太が競爭者ある畑泳ハ彼奴が幾ら騷ぐとも無學文盲で議員が出來るものかと輕蔑して居たるよ爲太が自ら演壇よ上り政談演説を催すとの廣告を見て始めて恐怖の念慮を生じ無學文盲と思ひの外公衆に對し政談を催すとハ近ごろ敬服の至りありコリヤうか〳〵して居られぬと少し狼狽の氣味ありしが夫よしても爲太が何時の間よ其樣あよえらく成たか兎に角どんな事を云ふか聞てやらうと曾日を待て傍聽よ行く と未だ演説の始らぬ前よ早く已に聽衆を以て充滿し爲太

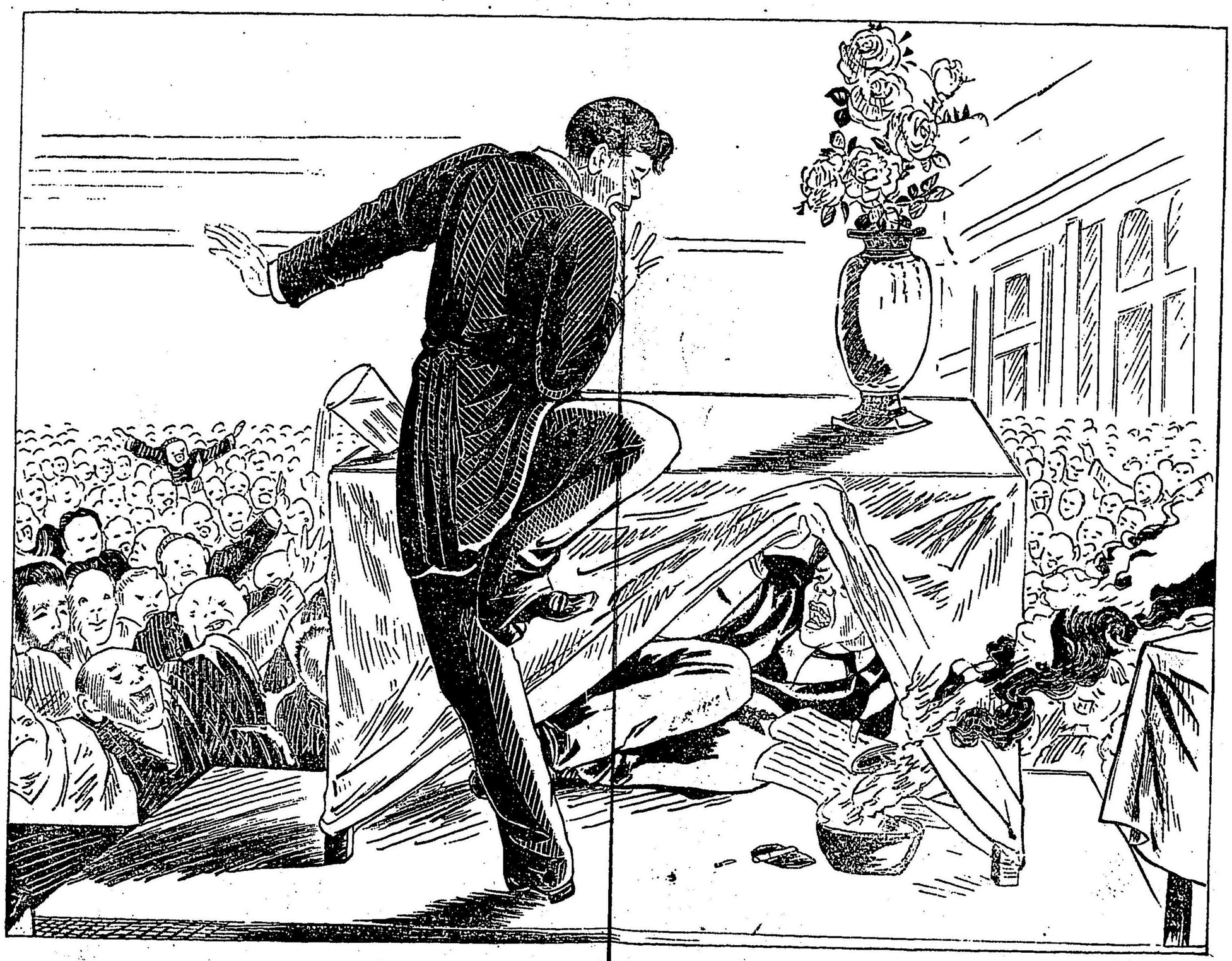
どんがどんな事を云ふか彼の人の事ゆゑ外の演説師のやうな堅くるしい分らぬ事ゝ云はず面白い落し噺でもして笑せるでかあと落語も政談も一つよ心得て居る連中が御馳走の返禮心で半日野良を休み此の曾堂へ集りたり中よも殊勝なるゝ六十餘りの婆さんが菩提樹の珠數を耳よ掛け杖を力よたどり着きオヤ〳〵何方さまのお説教かえらいお參りが多いと獨言つゝ聽衆の後よ座し何を云ふか更よ分らねど聲を張上るたびよ聽衆が手を叩くゝ定めてお有難い處なるべしと木綿編の財布より一文錢を出して投るを見兼ねお婆さん賽錢よゝ及ぬと傍の者が押止るとき辨士ゝ一段聲を張り　辨「我々人民を塗炭の苦みの中よりお救ひ下さらうとの聖旨ゝあんと添けあいでゝ御座らぬか

婆「南無阿彌

第十四回

反對者の演説ゝ聽くより妨げるを趣意よ入塲する者往々あれど畑ゝ流石よ學識博き男だけよさる卑劣なる心を持ず相手の出やうよ依り此方よも仕様ゝいろいろありと泰然として驚かず聽衆の内よ座を占めあの客嗇家が何を云ふかといふ風よて頤を撫で冷笑ひ居たるよ爲太ゝ更よ臆する色なく馴ぬ事として辨舌澁りをり〳〵途切て間の抜る節あきよしも有ねど其論旨正確よして音調の序破急こそなけれ抑揚頓挫自然よ備り恰も文章の筆記を讀むが如くなるよ畑いよいよ感服し一夜漬の俄仕込も盗賊見て縄よるやうな政事家先生がどうして彼やうな長演説をする

やうよ成たかと怪み居たるよ辯士は聽衆の喝采よ我よもあらで興よ入り得色面よ顯れて滔々と辯ずるうち如何したりけん途中よてパッタリ絶句し後の出ぬに聽衆ンッ〳〵笑ふもあれば氣の毒がるもありて辯士其後ン何でどさると聽衆の催促たび〳〵よ及べど爲太ン唯顏を赤くし唯今後を演じますと云ふのみよて辯じる樣子ンあくコップの氷を幾杯とあく呑み小聲よて夫からオイ何をして早くと呟く聲を聽衆が聞付け辯士何を云ひ居る早く演說を終り懇親會を開かないかとは馳走を當の聽衆がワイ〳〵喚くよ爲太いいよいよ狼狽しヤイ九郎さん何した後を讀で呉あくちや困るぢやないかでも暗くて分らぬもの而してこゝの處ン消た上よ書てあるから分らぬと演壇の下と



上との問答中九郎い火鉢の火よ翳し早く讀んとあせる機會パッと火が付き演説の控を燃して退たる上其火が演壇を蔽ひある寒冷紗よ移りしよ聽衆い驚きソレ火事ちやと一同総立よて揉消さんとすると演壇を押倒せば中より九郎が燃殘りし演説の控を持て跟け出るよ辨士い演壇より轉げ落ち柱よ天窓を打ちつけ額へ瘤を出來す騒ぎよと〜我から中止解散とあり抜跡よて爲太い眞赤よなり手家の九郎へくッて掛るよ同人い閉口し只管其失策を詫び二人の間い事濟しが此騒ぎよて演説後の懇親會もお流れとなりしを聽衆一同不滿よ思ひ少し人望の落たるこう好機會あれいで其間よと畑い勇み同群中の有力者を説て廻り若し諸君があの樣な文盲を一度や二度馳走された義

理よ選擧めさるやうお事が有ても各々方の恥辱のみでは無く郡部全体の恥辱でござるぞとゝ無理ならぬ云分あり と古老連中も否氣と現しいよ〳〵とあらば畑を選擧せんと變心したる向も大分ある由を爲太が聞込み是までよ資本を入て掛ッたものを今更畑よ勝を得らるゝやうの事ありてゝゆゝしき大事なり此上ゝ數十年來積み貯へた身代を、粉よはたく法もあれ是非此方へと半狂亂自身よ選擧人へ頼み廻り其間賄賂こそ使はね幾度とみき馳走に選擧人も弱りまた爲太どんのお招きか困ッたものぢや會席膳よ据るとも箸を取ぬ前から腹が一杯よあると贅澤を云ば一人ゝ又土地の藝妓も見飽たから外より最と美しいのを連て呉べよいと肥桶擔いでの立話し左りとゝ增長したお百と

爪彈するも知ず人の鼻褌で相撲甚句を我あるまでよ進歩したり

第十五回

手作の野菜のみを常食としたる田舍紳士も今ゝなかなか よ美食を厭ひ「食傷よつき當分御馳走を謝す」「手錢の外禁酒」など云ふ廣告を新聞に出し只管御馳走を避るよ苦心するも多かりけるが中よゝまた此御馳走を利用して新よ廣間を建增し「政黨御宴會よ限り定價一割引」などゝ景氣を持する料理屋もありて「何黨御定宿」といふ看板ゝ東京を始め各地至る處之あきゝ無き政事繁昌の世の中國を思ふ人が是ほど殖たかと思へば頼しけれどあか〳〵左樣ぢや内所の黑幕切て落した舞舞面と階子を上ッた樂屋とゝ香水瓶

と腸樽程の相違ありて識者の鼻を摘する歎わしさ名を取うより徳を取れと算盤づくの候補者あれば議員と成て名を賣らんと虚榮を悦ぶ熱望家あり其戰場に乘出て名實併せ收めんと慾の深田よふみ迷ひ時よ粟津の苦戰よ堪兼ねもうよし仲と我を折るかと思ひの外なる金尾爲太死よもの狂の勢ひよて飽まで雌雄を爭ふ所存と聞て驚く畑泳才學を較べて素より物の數ならねど金力ゝ一歩も二歩も讓るまゝよ此度の議員ゝ必ず定此方のものやゝか爲太よ負べきと腕を擦りて待居たり左れと此まゝよてゝ猶安んじ難しと郡内の豪家よて我説を贊成する人々よ説き爲太よ負ず馳走をする丈金を借んとしたりしよ何れも其不可なるを諭し成ほど其許の頼みゆゑ隨分貸さぬといふでは

無いが今當郡よて國會の代議士を望む者ゝ爲太と其方の二人のみのやうなれど内實何處よどんお伏兵がありてイザといふとき何ある非謀が有うも知ず云ゞ無盡の闇引も同樣あるよ當もあく借金して後悔する樣な事が有つてゝ惡いからと体よく斷り金の出し人なけれゞ兵粮彈藥のない戰ゝ出來ず無念ながら敗北の恥辱を見るも知れず宜し負るまでも是までに苦心した戰場を今更おめ〳〵兜を脱ぎ敵よ後を見するゝ學術の手前面目あし兎ても角ても此上ゝ我舌の續かん限り説て廻り夫で敗れば是非おしと決心するの外なしと流石勇壯活潑なる泳も少し打萎れ敗色見ゆるぞ氣の毒なる其失望に引替て金尾爲太ゝ演説の失敗以來人氣の落しを胸安からず思ふより一層馳走よ氣を

張り込み郡村の者が食傷するか爲太の城が落るかといふまでよ心を盡せし甲斐ありてまた〳〵人氣を持直し賴みもせぬよ五人三人黨を組み代議士選擧の節我黨へ金尾爲太君を當郡の候補者と定めたりなどいふ貼札を彼方此方よあし其勢力を助ける者あどありて何やら該郡の議員へ爲太よ落票すべき氣色の見ゆるよ畑へいよ〳〵心配し萬事を拋げ其事のみよ奔走するうち早くも明治廿三年七月となりぬ

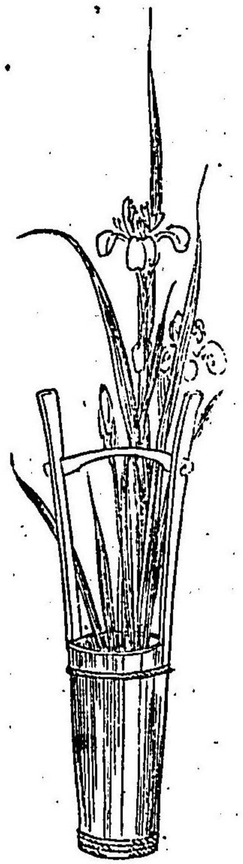
第十六回

衣食足て禮節を知ると聖人の誨有難し喰ふと喰ぬの界よりも廉恥禮讓を顧り見るの暇なくかうあれば昔の盧が恥しいとも特りおいらんのみよ止らず僅一年前よりも麥藁帽子よ木綿のへコ帶犬殺と間違へさうな大スチツキを振廻した山犬九郎も今へ一向よ鎮り返り主人爲太が選擧騒ぎよ乘が來て數年來溜込んだ在金を殘りなく遣ひ棄て猶其上よ家質入て金を借る始末よ呆れ餅屋へ餅屋の營を引世の中よりへ三通り仕事が有て擧者政事家實業家と鼎立してこう國利民福の趣意よも協ふなれ然るを如何よ政事が流行ればとて全國四千万の人民が一齊に政事家となり猫も杓子も政事熱よ浮され騒ぎ廻るが如きへ國家の爲よ得策とも存じ候へず左れば大學よ曰く國を治め天下を平よせんと欲する者へ先其家を整ふと御座りますと經書を引ての諫言も爲太の耳よへ聾ほども感ぜずヤレ〳〵貴公へいつの間よ左樣よ老込みしぞ此の間まであんそといふと政治

思想がおい〳〵と無暗と思想がるを權助が聞違がへしでがすさうか今年ハ生憎有ましねェが來年ハたんと作りますと紫蘇の種を一反半蒔たとの自慢餘りしそを馬鹿よした仕方と小言も云ず呆れたがうの思想先生が今とあり政事ハ政事家がするから打やッて置とハ分らぬ云分左樣あ後れた事を云ず明日ハいよ〳〵待よ待たる選擧の當日酒でも買て前祝よ一杯飲うぢやないかと寧そ夢中の有樣よ丸郎も我を折り選擧が濟べ身代限りと覺悟するの外なしと今更狂言の當り過しを悔みぬ斯て其翌日午前九時投票午後一時開札の事といふ郡役所の觸書よ一同畏まり奉りたりと早朝より郡役所の門前よ詰掛け陰褒も釣り方とやら我投票せし人物の當選せよかしと選擧場の周圍よ人の

土堤を築き結果いかよと片唾を呑み手よ汗握る其中よも畑泳と金尾爲太ハ一枚の投票を讀上るごとよ顏の色變り我名を呼ぶ時ハ悅び他の名の時ハ憂ひ一人が躍めば一人が笑ひ其心配ハ千萬無量外の見る目も笑止なりき頓て卓上の投票ハ大方開き泳も爲太も二百五十點今一點が勝負の堺勝も貞るも此一點と二人の胸ハ四苦八苦弼き渡る其處へ泳の宿より使が來り東京よの電報なりといふハ同く選擧の結果三百四十よ對する三百七十の多數よて當選有難しと悅ぶ處へまた他の地方より是も同じく當選の知せさてハ此地の當選ハ何でもよしと思ひしよ生憎殘りの一票ハ泳よ落て即ち當選ヤレ仕舞ふた爲太どのよ此當選を驚らんと千辛萬苦の思ひよて得たる選擧ハ此身の仇讓る

と云ど選擧人等が左樣いさせじと云ひ拒み何でも此地の代議士さま外の選擧を斷られよと引止られる苦しさよ其夜密よ手紙を遣し逃歸ッたるあとよて聞ゞ爲太ゝ選擧よ漏しを悔み是も其晩逃走したれゞ是非なく議員ゝ三番目の名もなき男へ落札し了りぬ



よもや草紙

山の手の　梅顛沙彌

池の端の櫻痴大居士が天眼通を以て今より十五年の先を視通しありてもしや草紙をものせられこれを日々新聞よ掲載せられたるよ日々の賣高も頓よ增加せしのみか之を輯めて一冊子とせられたるも既に三千部の購賣者さへありと聞くの浦山しさいでや鶴のまねするからすとのそしりごとゝ先刻承知と古びたる筆おッとり同じく豫言をものせんとはしたれども十五年を視通さん眼力なければ近かく來たる國會を開らかれたらん折りよいいかゞあるべきあどゝ推はかり〳〵ておもひいでたるまよ〳〵かき綴りたるゝ我あがら嗚呼がましかり

けり左れどこのまゝかいすてんもあたらしふおぼえぬれゞよもや草紙と名付て世よ問ふとゝあしぬこれもしや草紙ゝもしやかゝるとのあらんかとのあてさまあるよならひよもやかやうのことゝあるまじとのこゝろなりかし

第一回

明けく治まる御世も廿あまり三といふ今年ゝいぬる十年前よかけまくもかしこきわが敵聖文武の君の詔おき賜ひし如くおほやけよひろき大御心もてかの天下を天下の天下とし天下とゝもよ天下を治め賜ふべしと西の國よありといふためしよならひ賜ふとよゝわらざめれどうのはじめ大御くらしろし賜ふかねてより万機公論よ決すべしとの御誓言をひろめ賜ひ國會を開き稀代の盛典を擧させ賜ふ時こう到りたれうのむかしを顧みれゞ天下の政治といへゞやごとなき人々取はからられたまふのみよてうを彼是と批判するさへ笠の臺の飛ぶやうなるおろしき事も屢々ありしをいまゝいわれ〳〵が鋤鍬や十露盤のみかゝのみかんか拿る手にて議案とやらをひねくりて御政事よ口出しする有難き御世とこうなりよけれゝされば東ゝ津輕八方外が濱よりずッとの奥の蝦夷地とよばれし北海道より西ゝ薩摩がた沖繩の流れまでもうれ〳〵人民の代議士として規則よ從ひ選ばれたる人々の此東京よあつまるものゝひきもきらぬあり樣なり」「一聲の滝笛と共よ新橋の停車場へ午後一時よ着したる列車の内しかも上等の車室より

小き革包ヨフランケットと蝙蝠傘を持添へて辨慶形のス
コット羅紗ヨ狐の皮の襟つけたるオバーコートを着あし
山高き絹帽子、禮帽とか名付たるを冠りたる一人の紳士の
あり立たるハ誰目よも何の地方かの代議士なりとハ見受
られたりの供人よてやあやしげある洋服をまとハせた
るを呼ちかづけ別ヨ送り來せし荷物と受取らせあどして
うこらヨしばし佇立居たるをり「イヤこれハおめづらしと
聲かけて臘虎の帽子をとりながら一禮あせる男あり、かの
紳士ハこの体ヨしバし考ふるさまありしが思ひあたりた
るものと見え「烏賊君でハ座りましたか「イカよも佐馬四郎
でござります今日のハ上京ハ定てハ地方の代議士よハ當
選で「サレバでハ座ります不肖年ら「うれハ是非さうなけれ

ばならんことハ地方で君の人望ハ東京にまで響いてお
ります此選ヨ當るもの君ならずして外ヨ人ハ座いませ
んと云れて頗る得意顔ヨ實ハ好みもいたしませんがとハ
口先計りよてその實ハいぬる年〇〇費とやらの事よつき
縣會よて飽まで縣廳官吏よ抵抗し中止より解散とまでな
りたるも此紳士よ首唱なりしより頓よりの地方の人望を
得議員改選の折も多票の再選を得たれども或老成人の忠
告もあり且ハ今一層の人望を博さんものと故意とこれを
固辞みたりしヨ益々人心の歸する所とありて其屬籍の縣
のみならず近きわたりよても此上あき人物の如くいひ囃
されたれど其實ハルーソウ民約書の飜譯位を少しく讀か
ぢり民權とやらいふ事を覺えたるまでよて其上リーダー

の二三冊も稽古したるよや怪しき英語をいさゝか嚼づるが關の山位の人間なれども餘りよ多くの人よもていやされて今い我と我身を忘れ天晴ある政事家よでもありたる如く思ひあがり我こうい東洋のかンペッタありと自ら稱し誇りたる烏なき鄉の蝙蝠みれば飛で井の底よ入りて蛙となるも生物進化の理合是非なき次第とやいはん即ち○

○縣の代議士名をバ伊具野廉太といへるまだ三十前後の壯夫にて此度國會の初よあたり一の妙案を提出し天下の譽を博せんあどゝ鈍くもおもひ起したる白徒ありかし烏賊いなほ詞をついで「うしてお宿い直よ此近所で東京ホテルよ致しました實い沒當地の案内がしれませんから先スティションから近所でナールそれい宜しう御座りますあすこあらば沒身分相當僕い日吉町よ居ますから御近所ゆゑいづれ其内伺ひませう左樣あらバと手を振り各左右へ別れけり

第二回

六疊よ六疊と二間つゞきし上の間よい形バかりある床の間ありて怪しき狩野家の鶴の畫かきたる横軸よ懸花活よ寒菊の二枝三枝折いれたるも水やつきけんはや半ば萎れて見えたり次の方よい皮箱柳行李あど取散しあるい言でもしるき下宿屋の一小樓てゝに宿りを求めたるい是また代議士の一人たる口尾敲といふもの有りけり今日いりが同鄉よて且同窓の友ありしとか訪來りて先より話しもつぼに入り打興じたる折しも

下女「旦那アノ貴君のお宛名

で此端書がまゐりましたと差出すを口尾ハ手ヨ取り俄に穏かならぬ面地ヨて「サウかといひあがら側ヨ置きたるを客はナンで御坐りますその端書は　口尾「ナニつまらない

客「しかし君の様子が變ヨ見える何か譯が……僕ハ君と同郷同學の好みばかりではあく先年御上京の時分ヨもあれほどお心易したことだ何だッて話してもいゝぢやないか　口尾「ソレハさうサ何も困却るのサ併し僕も他ヨとんな相談相手もなしャアこんな事だと差出だす手紙を手ヨ取り見て客ハ「ヤアあんだ三年斗りあとの貸がモウ訴訟期限がきれてゐるからうッちやッて置がいゝ君ヨも似合ないぢやあいかこれしきヨ「イヽヤこれしきでおいサ實ハ僕も君と同じ見識でうッちやッて措く氣だが夫もこまる

のヨ先年目ヨかゝッた時話した通り僕も田舎で打果てるも氣がおいから何か官途ヨ就きたいと志願ハしても漸く世の中が辛くなり試驗のあんのと六ヶ敷からうれ先年壯士とやらの仲間ヨ入り鬼の面をかぶッて出京しうれを種ヨ貴顯の家ヨ出入してかの籠絡主義とやらで何かしてくれる人でもあらうかとでも考へて出て來たが東京へ來て見ると何がさて遠がハ大都會で面白だらけサそこで交際のあんのとは本の言草實はッイしんから浮れ出して君も知てる通り　客「知て居るナニ三年前の惚語かこれも期限がきれてゐるヨぬきヨし玉へ　口尾「ナニ惚けでもあんでもない新橋や柳橋ことに北里あんぞであッちこッちで持合せもあヨもすッて仕舞ひ國許ヨなけなしの財産まで

打込んでもまだたらず何處もみんな足だらけ何しやうかと思ッて居ると好鹽梅は保安條例で俄かに退去の沙汰をくらひ二人の巡査に挾まれてうの翌朝は横濱から西の海へさふりサ下宿なんぞもあんでも三週間からの滯りがあッたやうだがうれい何うかしてくれたらしいが外れさういかずサそこへヤァ代議士とかなんとかいと譯で再び出京は有難いがうれが恐ろしさに何處へも出ずにゐたけれど生憎代議士の名前と下宿とを立派に印刷して賣歩行くちやないか夫で方々から矢が出て來てこの口あんぞはじめは郵便で御直展あど、遣てよこしたからうッちやッて置たら昨日もこの通り端書で御遊興御立替のなんかんと大きな字で書て來るサ今が今の事でもあいが帝國國

會の代議士といふ体面よりは下宿屋の前もまずいぢやあいか此樣子では今度は議院へ向けて端書で出されるよ違ひあいさうすりや面目玉をぶッ潰さうでもあいか困るよ客「ナールさう聞けば打ちやッてばかりも置けあいがナコ金は湧ものだ僕の知己は隨分金の周旋をする者もあるからどうでもして上やうがこゝが孫子の兵法で虛を虛よして實を實にするといふ所だがナニ今夜の染賃さへあれば是から逆寄に進擊サ先方も愛嬌商賣だし殊に今では代議士といふ結構なお顏だすぐ催促あんどゝいふことは大丈夫あしサあとの端書の防ぎもそれで當分はできるといふ策略だこれは彼奴もまだあゝしてゐるから久しぶりで顏を見せてやり玉へ　口尾「馬鹿ァ「ばかちやない大利口の

策略だ政治家にポリシーといふものがあくてにいかん行き玉へ〳〵時よ君が先年出京の時分はナいんま君が白狀の通り正直人民の利害なんどゝいふ了見にないがアノ大臣連が地方へ巡回と來ると奉迎の隨從のと何處でもかでも大騒ぎをやらかすがその大臣に及びもないが隨行の○官おんどに悪くいったら虎の威を借る狐とでもいはうかヤレ宴會ャレおよと料理よや食あき藝妓よやおくびがでるといふやうな勢だが責てその○○官位よやなりたいとしみ〳〵話をさッした事があッたが一時壯士仲間へはいッた陰で今日の代議士とに結搆ぢやあいかりして一番議會で君の名論を振ッたらまたどうかチ「尤も今度に僕も是非一論を出してやらうと思てゐるサてれでも口尾敲

だ「うれにさうともういゝ、潮時だ行き玉へ〳〵と勸められ左らばと手を敲きて下女を呼び「オイ姉さん二人乘を一挺急いで

第三回

江一格子よ神燈と書出せば看官は藝妓家と推し玉ふべし成る程りの通り爰よりの樣をしるさんも古めかしけれど筆を省きぬりの藝妓家の長火鉢の向ふと前よ差向ひぬる此家の抱へ兩人の子供「アノ姉さんてんかさみしくッちや否よあるチ「サウサチ本とうよチアノ家の姉さんばつかりの時よやチ姉さんがあァいふ氣前だから他所の子なんぞがお前さんは仕合だ宜處よ住てんでといはれたんだけれど(大指をだし)がチ入りてんでからに朝も少し遲くある

と直よ小言だしお茶でも引くとおつよ睨つけられるしほんよ馬鹿げてゐるのサ何も旦那といふ譯でいあしャア居候もおんあじの癖よチ「うれでも姉さんが惚てゐるから仕方がない「ナニ姉さんだつても今じゃ少し鼻つまみのやうヨ一体苦みばしつて嫌みけなし年増惚のするといふ男振なのよ樣子いよし喉いよしちよつと糸道も明てゐるといふ上よ風呂敷が大きいから流石の姉さんもッイ包こまれて仕舞ッたのサそら神戸屋でお花の夜明しから上野の新坂の温泉といふ寸法で四五日おッ續けのでれ遊びでと〳〵客の勘定だつて内へ大玉の金釵を曲げてくれつてよこした事が有たッけ矢張惚たのだらうかまた少しい見込みもあッたよ違ひがあいのサうだが今のやうよ入

込れてい大あて違ひだらうヨ第一わたい達が困るワ此間もみけ吉姉さんが轉びうこあッて足を痛めてすいのでを踏出してサいのご震ひがするとッてかひ卷をかぶッて寐てゐたらチ口がかゝッたけれど寒けがして堪らないから斷ッてと云ッたらね何所からも口が掛らないなら仕方ないが口がかゝつて來たのよ寐てゐるといふのい横着だッてチそんあら玉も祝儀も帳面よつけて置て跡で勘定を引から宜とまた(親指をだし)いふのサ脅しか知れないがうんあ非道な家があらうかみけ吉さんも泣てわたいよ話したのよ自分が抱へたのでいあし余計お事ちやないか其パッかりでいないの此間も縁屋から口が掛ッたからわたいが出て見るとまた(親指を出し)ちやあいかわたいい惚らし

たから外よお連が有りますかと云たらチ呆れたワ連れも何よもないお前よ少し話が有るッてサうれから七段目でいないがじやらじやらじやらく

〈サわたいい腹が立たから何時までも旦那と差でおていい姉さんよ濟ないッてずんく

〈歸て來たが呆がお禮よ來るッ「うう、言ベチ此間もみけ吉姉さんのことをチ家の大姉さんのものを盗んでゐると云たお客がありましたヨ「ホントよ否だチと噂さする夾よ糠袋を口よ啣へ鬢のあたりを洒き指よて搔上げながら格子戸とあけ入來る女い年い三十よ一つ二つも下あるべし眼元すゞしく鼻筋通り色飽まで白く口元よ愛嬌あるさすがよ泥水よ磨き上たる丈けありて如何にも垢抜けはのした一個の別品これあんこゝの内の主人うわ吉よて大姉イ

と立られて土地よ屈指の藝妓なりけり上り早々鏡よ向ひ彼是しながら「小ぶちさんみけ吉さんいエ「アノ狐穴へお座敷ですすしてあの「兄さんですか兄さんいチ姉さんがお湯よお出ですと直よ何處かへお出でした「オヤさうもう暗くあッたランプでも灯けてチうしてモウ皆あお飯でも喰ておしまひオヤいやだもう七時だよといふ折から歸り來れるての内の居候よて旦那も亭主も兼勤する好男子い第一回よスティショシよて伊具野廉太よでッくわせし烏賊左馬四郎よてかつて或る銀行の取締とか肝煎とかをも勤め頗る財産もありたるよ藝妓の女郎のと霧樂よ遣ひ果し終よい銀行よ筋あしき引負まで出來れとも人づき合よき男よて最負ものも多かりければ幸ひよ詐僞の刑名のみか

表向身代限をも免かれたれど今は文なしの遊び人高利貸の口入や代言人の眞似あどるとやう〳〵と世を渡る次第あがら猶も其かみの狀態を變へず何の席に出たりとも其内輪を知りたるものゝ影で舌を出すこともあらんなれど矢張旦那〳〵と立られるて西の國より金の茶釜も持つてゐるといふ樣なうぶりする喰せのもゝ隊長よりの手よかゝる藝妓も頗る多しと聞えてうわ吉あども其一人あるべし其歸り來れるを見て「オヤ早かッたチどこへ行ッたノ狐穴サオヤみけ吉も狐穴へお座敷だといふ事だが一座かエりれよしてゝ早かッたねといふ虛か眞か知らねともすこしく聞くところある故よして聊か角の氣味あるゝ人情と知る可し」一座ヨあの伊具野かの……さう伊具野と言ちや

お前ゝ知なかつた隨分かかしお椋鳥でから遊びなんぞゝ知らない奴よだが今度代議士よなッて出て來たのさこの間スティションで出會したが大天狗よありあがッて平生から横柄なのが猶を横柄よなりアがッたのサ併し東京よゝウンといふ身代だ持てゐる奴だから取まいて損ゝあいと思ふから今日のドンタクを幸ひよ狐穴まで引張出してのみけ吉をあてがッて來たのヨ悪皆みけ吉よ吹こんで置ておらア用があるッて外して來たのヨ「さうかエ私ゝ今お湯でねいやな話しを聞て來たノ「あんだ「あの國會とかでチ藝者をおはやしよするといふ案とかゞ出たといふ新聞があるとチするとての商賣もモウ先がないチ「さう違ひねエその案を出した奴が今いッた伊具野ヨどうせ通る氣遣

れあいが世の中よりやッてらさ連が多いから少し珍らしい事といふと直ぐ野次馬が飛出してその尻尾をつくからあんとも言へない無用心だと思ッたから此問……おめエが二三度でたとか聞たあの口尾ヨ彼奴も代議士よあッて來てゐるヨ「オヤ口尾さんもでずかあの方い遊び好で私もお座敷へ出たことがあつたがいつかの大皷さわぎで田舍へすりして敗北屋の細蔦さんがね「大皷かァハ、うの口尾だがあれはおらアッウ國で子供からの友達よそれだから此間も下宿をたづねて昔咄しを仕出して夫から話ふ枝がさいて實があッて廓内まで繰込サまんまと燒木杭よ火がついて今ぢや先の通りせッせと通ふ樣子だそれはどうでも彼奴おんでも負おい氣で人が左といふと右といふ質だのよ今度の國會で一番やんやと言せやうといふをもいれで居るから其處へつけ込でナ彼の伊具野の向ふを張れと煽動ておいた口尾がゑらいといふ譯でもおいがあいつ辨口がいゝから何とか言出したらまた其味方も出來るたらうと思ふのヨどうせ伊具野のいふことい通りいしおいサうれよ今夜ハ一番藝者の味をゞさせる積りだからさうしたら自分のいひ出したことを後悔するかも知おいアゝ酒が醒て來たら寒くおッたなんだ其處よ何かあるぢやおいかィヤハヤ相もかわらずしやもかでもいゝや一本つけねエ一杯やッて寐やうナンダ外の子供も奥で義太夫のおぶひか日がらだといふのよ恐るナ荷物だナといふ時箱屋なるべし姉さん大急ぎ穴のや迄うのまゝでもいゝとッて

ぶでざります「ありがたう直によろしく「ナニ穴のやだよしねェナ高輪のだらう（もとの馴染と知るべし）「それでも口の掛ッたのよ斷ることといないとお前がいッた事があッたちやあいか「ナンダべらぼうよいきたがるナ高輪だらう「馬鹿ナよしておくれヨお前がかうこゝへ來てからちや今まで最貧よしたお方あんぞゝ皆なしくじッて仕舞サたまに素から知てるお客よでるとよッてたかッて騷りちらされる計でほんとよお座敷へ出ても馬鹿らしいノその外この節いあんまりお座敷がおいからとッてふりのお客の時よお茶やさんの親切で呼でもらふ位ぬだからモウ今日で三日もお茶を挽てぬるちやあいか子供の手前もあるから行て來ますヨ私ハ大方麻布の御前であれがお供よ來てぬる

のだと思ひますワ行て一中節の一二段もやらかしやいゝんですから「ナル程さうだらうんあらチ今の咄しだがどうせ伊具野の言ぐさが通るものでハあいが若も通つた日はみやうれが上院へ出るのだスルト御前のお掛りだから今から序よお話をしておくがいゝ「承知だよ、といひつて出行くところよ引ちがいて又候箱やが「みけ吉さんハ夜どほしよありますとそして箱ハいらあいといふ事ですから下て來ました　男の聲「難有う

第四回

東京倶樂部の喫烟室イーヂー椅子よ腰打かけ口よマニラの卷烟草を燻らしながら夕配達の報知新聞を手よ取りて年の頃ハ六十近く頭髮鬚髯ハ既よ斑白よ及びたれど視力

いまだ衰へずと見えて眼鏡も掛けず讀居たり是なん上院よりの人ありと知られたる門閥といひ年齢といひその德行ハ知らねども學識才辨双つとなき名望家として内閣よりも一目を置るゝとか聞ける宇和佐伯爵なりけりこゝよ入來る少年の紳士伯爵を見て小腰を屈め誠にお久しうございます閣下よりいつも御健勝でといふハ東京新聞の主筆聞成覺彌といふものなり伯爵ハ椅子を離れてその手を握りながら「どうだ此頃ハ喧忙しからう」何もうの晩の議事を翌朝の紙上より戴ますのですから筆記者が歸て來て清書から印刷校合とやります内よりおんぼ夜が永くてもモウ白んで來ます先づ始終徹夜の体で御座ります「イカサマ左樣だらう併しモウ下院の閉院ハ程もなからう」でござりするとハ少しハ暇が出來ます時より此節の下院の議論ハ「左れば今日ハ社會ハあんなものかと思ふと淺薄しい氣がする樣だ初のうちハ内閣でも下院の議論よりハ隨分心配があって○○の法案あんぞハ迚も通過ハしまいさうあッた上院で一ッ突張て貰ひたいあんぞと怪しからぬ御託宣抔があッたといふ評判がある位で僕ハ迚も通過しまいと思ッた自分も左樣存じました「左樣だらう處が意外の結果一体跳かへり人物が多くッて何でも下附の議案よりハ反對さへすれバいゝといふ見識で糞も味噌も一所よして矢鱈と駁擊をやらかすものだから却て場中の賛成を得がたい夫にまた田舎者ハ正直だ村方で本統よ人望を得て當撰したといふ樣な奴等ハそれ大臣が臨場演説なんぞと來

るとモウ直よ一歩を退く氣味がある處でノ〇〇伯爵なんどが例の能辯でもッて中外古今の歴史を引て滔々と論辯されると遠がよ跳かへり連の疎暴一邊の論とnちがふだナ何でもお有難連が大和尚の説教でも聞たといふ有樣でどうしても贊成者が多くおり反對論n折角理窟がある よしても人氣がよらおいだ夫であんお〇〇法案までが首尾よく通過nどうだ兎よ角國會開場第一よ内閣の大勝利nば芽出た過るナ人民が幼稚だと能く學者が論じるがなんと是非がおいぢやないか「高論の通りでございますそして共跡の下院の樣は「オ、新聞でも見たし噂よも聞たかの法案を建議するといふ一件ださうだ藝妓禁止の法案だとか「左樣でそこがまた隨分ヘ、、論旨が面白いでございます

すマアかうで飲食男女n人の大慾の存する所よして色食n性とさへいふ位おれバこれを制抑するn人性よ戻るものよて即ち天理よ違ふものおり加之ならず衛生上よも幾多の弊害を生する事おれば生理學上にても餘り抑制を加ふるn人体を虚勞せしむる源因となる譯だとまで明言する所なれば娼妓といふものn社會よ欠べからざるものなれども藝妓といふものn專ら娯樂の爲よ外あらず此上も なお贅物おれバ有無とも社會よ影響あるものならず夫だから禁絶すべしとの主義でございます隨分不思議です「フーン」こで又反對論者も出ます是が又妙で何か白拍子の昔から系圖を引出して人生娯樂といふものn欠べからさるものとする以上nうの娯樂が風流高尚よして粗擴野鄙

の習ひを棄る樣よしなければならん夫よゝ藝妓といふものゝ必要のものにて現よ今飲宴の席よ此一輩の其座よ周旋することなきときゝいつも丼の投りくらおどが起るゝ何よりの現証よて廢すべからざること勿論なるのみならず娼妓の如きよ至りてゝ只肉体の慾を充さしむるものよて文明の世よありて風上よも置くべからざるものあり其名の社會よ存してあるも外國よ對して遺憾よ堪ざること

ろあるよ況んや其實の存するや抔とてれゝ又娼妓廢止の法案を建議せんといふ意氣込で藝妓廢止論を辨白するでスるとまた彼藝妓廢止論者が備生上から說だした說を擴めりの賛成を表するものがありまず夫ゝまた備生上りの慾を抑制するゝ悪いといふことあれば男女の別ゝない

筈だ殊よ情慾上から言ゞ男子よりも女子を甚だしとす詩經よも有女懷春といふてあり有士とゝ言ゝず浮璃理よも死ぬ生るといふ騒ぎゝ女の方が多いそれが何よりの証據で座るされば男子備生上娼妓を必用とするるれゞ女子のため男廓設置せざるべからず然らざれゞ男尊女卑かの野蠻の陋習を脱せず女權擴張の今日ゝ似氣もおき次第で果して斯の如くならば彼米歐等よ選權被選權を女子よ與ふべしなんど、論ずる位ゐの事でおく實よ男女同權の美風文明開化の極点ともいふべしとて藝妓廢止論よついて男廓設置法案をも提出すべしといひ罵るやうもありまず愈々いで、愈々奇といふ場合です「ハヽアさうかナ「それでまた可笑い「ゐよが「その藝妓廢止論の首唱者がをかしい

閣下も御存じでありませうアノ伊具野龍太でこれが此節或所の藝妓よ「オ、さう〳〵りの話も聞たト覺彌ん暫し考へ居たりしが「ナール左樣で御座りませうナールすッかり電信が「ナンダ新聞屋ンよく「閣下ン探訪がとゞきませうヨアハ、、、、

第五回

下院代議士の扣席よ寄合ふ誰彼おの〳〵煖爐の傍よ椅子を引寄せ　甲「今日ン例の議案の決を取るのだといふことだが君ン何と思ひ玉ふ　乙「僕か僕ン何とも思はない　甲「これでも決を取るといふ時よやどッちかよ起立せずばあるまいが　乙「左樣それよン困却るのサ全体藝妓を廢して娼妓を存するとも娼妓を廢して藝妓を存するとも何方がどッちでも僕あどういゝと思ふ其樣な事より帝國〳〵會よ議すべき事ンまんだ有さうなものだ彼樣な事よ議論のやかましいのン實よ馬鹿げてゐらァ僕ンどッちでも起立ずる積りだ　甲「何方でも起立する贊成〳〵僕もその通りだといふ時傍より　丙「イヤうの事で御坐るテ僕が國許よ彼の〇〇伯爵閣下が御巡回があッて何でも小異を捨て大同を取らあければあらん然らされば此日本國ン外國の爲よ併呑されてしまふと怨〳〵演說のあッたのを覺えて居る成程此度の藝娼妓の存廢あんぞン爭ふのン小異だ亡國の道だ不祥の甚だしきものだ各位のどッちも贊成といふのが即ち大同といふものでれ座るテ　甲「如何よも大同の極忠よ協ひました處を何です諸君ン有あふ代議士數多ありし

が一同より「イヤモウ僕躍り其大同より賛成で座るといふ内
よチリン〳〵と振鈴の音と共に一同議場に列座なしたり
議長は椅子を離れて前日の會議より百十五番より提出ざ
りまして諸君よも反對駁撃の説もば坐りました藝妓廢止
の法案に付きましては早最討論も尽たりと存じますれば一の
決を取ります彌々各代議士多數の賛成を得ますれば一の
法案として上院へさし廻します心得でば坐りますと演説
ありて一ト際壁を張上げ藝妓廢止の法案は百十五番提出
の説より同意の諸君は起立と呼はりたるよ滿場の四分の三
は皆起立して同意を表したりしが前回來反對説を唱へた
る議士も其内より見えたりしかば議長は大いに怪しみ何か
行違ひしものなるべし此まゝよては決し難しと思ひたれ

ば今一應反對説を以て衆論の一定を試みばやと心付き再
び「藝妓廢止論は場中多數とは見受ましたが再び其反對より
付て確かめませう彼娼妓廢止の法案現より百十五番より反對
でば坐りました即ち七十八番の説より同意の諸君は起立と
いへば同じく場中四分の三の起立を得たりしより議長は益
々困じ果てたれど又思ひ直したる体よて再び起立し諸君
も見らるゝ通り現場の有様よては何れが興論の歸する所
とも相わからず就ては更より議場より問まゐらせん前兩法案
は藝娼妓廢止の建議より不同見にて兩つながら存すべしと
のば意見ある方は起立と唱へたれば此度こそは前二回より
りも多數よて殆んど六分の五程の起立を得たりければ議
長は立て宣言せしは最初藝妓廢止の説より起立ありし多數

の内より藝妓存すべしとの意見よりせられし諸君もあることゝ存じまするは娼妓廢止の論より起立ある多數の内に藝妓存すべしとの意見より せられたる諸君もあることゝ信じまする右より付き最後より其兩端をたゝき兩方から存すべしとの意見ある諸君の起立を試みましたるより果して大多數を得ましてござります就ては百十五番並びに七十八番提出の法案い何れも贊成者の少數あるを以て最早本院の意見法案として上院へ回付するは及びません今日は散會といへば議士等一同其座を立さり扣席より至れば我が提出の法案の通過せざるより伊具野廉太は勿論反對者の口尾敵も議場の現像より不平を鳴し議長が決を取るとの面白からざりしと呟やくものもありしかれど又一方はあすこ

が大同の所だと呟やくものもありしかれど又一方はあすこが大同の所だと何か誇り顔はいふものもありて皆退院をぞおしたりけり

第六回（上）

下院は時日を錯たず下附の法案は悉く議了上奏し議士の内より建議の法案もありたれども數日討論の末終に廢業に屬したれば某月某日を以て辱けなくも天皇陛下は臨幸ましく開院の式を行はせられ各地方より上りたる代議士どもには皆お暇を賜はりたれば各々歸郷なさんとする支度それ〳〵あるうちは先づ一同告別のため一の懇親會を催ほさんとの發議者あり鴎遊館にて一日の宴會を開かんとて各議士は回章をば發したり其日は至れば日章

の國旗を門上に交叉し席中の裝飾等も頗る其美を盡し獻酬の交錯絃歌の嘈囃等茲に記すも煩らはしけれど省きつ寄合ふ衆客の中より　甲「妙だナ伊具野が今日の斷りゝ何故だらう、乙「何故だつて不平だらう　丙「不平斗りでもあるまい斷りも尤もだぜ彼奴があんな法案を建議しおがら自分ゝ或所の藝妓を退籍せて歸鄉するなんだナあんまり此會より面を出された義理でもあるまいりして昨日の「やまとなんぞゝべたどおしよてなしたから流石の彼奴も弱ッたらうヨ　乙「成程うんな事と聞たが本統かナ併し其藝妓が娼妓同樣で所謂大慾を充たしめて出京旅寓の營生をさせたのだからして見れば全く所論と違ふとも言おいァハゝゝ　甲「名論ゝゝ尤も贊成だ夫ゝさうと伊具野ゝ鄉里に確りした財産があるのだから藝妓の一人や二人退籍せて携帶して歸鄉するといつて平氣な者だらうが聞や口尾は先年の買馴みとかゞ年が明たので押込れて大因却といふ事だが彼奴は先年出京して無暗ゝ遊びをッたで資産ゝ費損て仕舞ひ今度漸う人の財産を假ゝ書替てもらッて表向被選權丈けを拵らへて出て來たのだから茲でうんお荷物を背脊込では嘸困るだろう彼奴も今日ゝ見えおいかハゝゝア會費をかおしんだナ一体藝妓廢止論者が藝妓を退籍させ娼妓廢止論者が年明きを背負込むおんざァ隨分反對も高じてゐるナあべこべ過るヨ　丙「反對……あべこべ當然サ同前ゝ議場へ出てゝ彼是といふけれど本心から眞面目ゝ遣る奴があるものかエ時々場合でゝ心ゝもない事を

いひ出すし風の摸樣より依てい尤もと思はない事も贊成するがよく考へて見なさい隨分あり／うちの事でいあいかも何も伊具野や口尾斗りぢやあるまいハアヽ　甲「さうあるよも同前の內幕を持出さるくてもいヽぢやあいか併しあの時の取方は何だ議長も仕惡かッたよ違ひあい全体矢鱈と起立するから困るといふ折柄其傍らより聞ねたる或議士い「コレ〳〵君達は何を宜ふか其處が大同だ　甲「ナニ大同……夫が間違だ大同でいあいと言へ猶爭ふべき樣子ありしかば幹事の某い見て取り「大同たア何だ茲い鴎遊館の座敷だ大道であい事は誰でも知てゐるよアハヽヽと議論の小口を戯談より紛らしたるい又一箇の老練手段より議長が今度の法案を決せしもおさ〳〵劣りあかるべし同日の事より口尾が旅宿で「時より君何をぐづ〳〵して居るのだ今日い君達が懇親會の日ぢやあいかと言つゝ入來る烏賊左馬四郎より口尾は已れがあたりゐし火鉢を先へ出し左馬四郎より宛がひながら「うれ所か此節の始末では先づ一圓五十錢の會費丈けでもカスる工夫でもするより外より仕方がないヨ君見チーあの仕合せだもの……僕も困り切ヨと次の一間を指せしい彼細葛が入込來りしを指するべし

第六回（下）

何だそんな事い何でもいヽ僕が引受て何かするようして最う君も歸國の都合たらうがいつかの一件いどうだ「それも頭痛の一つだて矢張出來ないた君い同鄕だから僕の事いよく知て居るだらう元い些との田畑屋敷もあつたけれ

ど先年壯士連より入り上京した時無暗と相塲をやらかして無けなしの資産も殘りあしで今じゃ廐得青樓薄倖名「ナニ薄倖名でもなからう廐得年明女郎來たァハヽヽヽ」「うの通りだからヨ僕もヽう識士たるべき資格もあくして仕舞たのヨ併し弟が養家も相應の身代だからその半分を讓受た体よして表向の被撰權だけよ財産を拵へて斯う出かけた位だから今から鄉里へ言て遣つても急よや六づかしいのサといひつヽ再び次の問へ指さし彼の方も存じの通り僕よや親もあし子もなし女房も勿論あしたらう何かなるたらうが君の方のも……第一君よ氣の毒だ「ナニ〜うこれ僕よ任し玉へ實も君も知ての通り僕が女房見たやうあソレ彼のうわ吉が妹と云のがあ素も矢張今晩仲間だッたが今でも彼の宇和佐伯爵よ退轉されて外妾樣といふ身分でチンと澄しサあの金も其奴の臍繰だから損さへさせなければ何も今日が今日といふよも及ばあいうして君も豫ねて東京でどうか仕たいといふちやないかうこで僕が一番法をかくよヨ夫今あの人を田舍へ遣て仕まふとまさか貸した金を蹈んで仕まふまいがちよッくら一寸返る譯よも行ないから宜い驩梅よ旦那よ吹込んでこヽで月給よ有つく樣よすると問遣ひなく取れるからと甘く周旋させると伯爵も疾から君を知つて居るし居るどこでもない彼の古銅の饕餮鼎を君よ鑑定を頼んだ事が有たッけうの時も君が才辨と考古の學よも感心したらう夫れそんな緣もあるから何かあれるだらうれも妙だ願ッたり叶ッたり

と云のだと覺ゑ程もなく口尾敬ん議士の名もあれば判任の末より相應せず又高等官より試驗ゑ法もあればといふ譯ゑてもありしか考古家の名目ゑて博物館に出仕の技師めいたる役目ゑ有付たりしん宇和佐伯爵が女謁の爲ゑ周旋せしあるべしと思ひ當りたりしに某縣ゑてん議員の飲を生じたるより左馬四郎ん其圖を外さず彼みけ吉を取持て伊具野と親しく交りし末同人より金子を引出し郷里ゑ歸り當來持居たる田地等を取戻したる上ん豫てより名主の次にも坐るべき家柄あるゑ螺ゑかけてん口尾より も又一層なる上へ東京ゑ久しく居て政治ゑも社交ゑも熟せりと一般の人望を得て直線候補ゑ指名され引續て口尾の飲ゑ補せられたり

もしや草紙い猶長かるゑ己の草紙ゑ餘りゑ短かきん草稿を鼠ゑでも喰れしかとの怪みもあるべけれど卷中猫の多くあればうの氣遣んあらずともオの短きものん矢張文も短かしとサテ口惜し

第一回

衆議院既より閉場となり地方より招集されたる議員い漸次出發歸郷したり其中より唯一人伊具野廉太い性來不粋よして藝妓の何たるを解せず偏に米を食ふ虫の如く心得藝妓禁止の法案を議會より提出し大喝采を得んず所存ありしも當事と何とやら向ふより外れてマンマと失敗したるよ面目を失ひ日頃高慢の鼻も頓よ挫け友人の訪問を受くるも病氣と稱して面會を謝絶し旅宿の二階より燻り居たるはよりの見る目も笑止ありき加之ならず左馬四郎の策畧より依り否なながら伊具野の心より從ひし藝妓みけ吉は根が跳返りの浮氣者土臭い田舍紳士の傍より居るを嫌ひ痴氣が頭へ昇つたといふを云立より飛出してうわ吉方へ戻つて見ると常から烟たく思ひ居たる左馬四郎いうわ吉方を立去り國へ歸へったといふより安心し更より同家より以前のみけ吉で再勤する事とありぬ沐猴よして冠すとい此等の謂ならんかとの悪口いあるもシルクへットよフロックコート胸よいアルミの金鎖目ぺゆく奏任車を軋らせて伊具野の旅宿へ横付にしたる一人の紳士踏倒しの屑屋より見せても五六等の奏任官と確より踏める扮打ふて入口より立はだかりいと横柄より伊具野い居りますか　下女「ハイ入つしやいます何方さまでございますと問れて洋服の隠嚢より百枚五拾錢よて一

枚五厘づゝもしさうな大きな名刺を「某縣選出議員」と肩書のあるを片隅折りて差し出せば下女は名刺の表を目を注ぎ口の内よりて讀むふりをすれど實は此問まで房州の海岸で網引く手傳をして居て學校の門を潜りし事なければ文字の縦横さへ分らず其まゝ伊具野の許へ持參すれば「ナニ烏賊左馬四郎……縣選出議員ナる彼奴が何して議員よ成たか何よしろでゝへ通しを」「ハイ畏まりまし」「たと下女は店へ走り行き伊具野の座敷へ通したり烏賊は別後の挨拶了り貴君は議院閉場後引續き浦京ですかりれゝ〳〵嘸と云掛たが氣を壁へ時よ例のは此ところ何か不埒を働きお暇が出たそうでイヤハヤとんだ奴を拾周旋して嘸ぼ立腹でしたらう」「イヱまよ浮氣商賣の者よて愛情と云ふ事は

勿論德義の何たるを解さる奴等だから仕方がありませんが實よ女子と小人養ひ難し歎息の至りです重々ぼ立腹の段は尤もで僕もりんお女では無いと思つて居たが實よ呆れました竟畢あゝ云ふ奴があるから藝妓禁すべしとの説高論が出る譯で左馬四郎恐縮の至りですだがね君、君はあの社會の内幕をぼ承知ないから德義を重じおいとか愛情が薄いとかいふ説もある次第なれど夫てそ大きな買被りよて藝妓を羽織と云ふ昔は知らず當今の藝妓の下落さ加減は實よ驚いたもので白襟かおにかでお座敷へ現れく處は何處のレヂーかと思ふ位品のよいのがあれどぼ神燈が下つて居る格子戸の内を覗いたが最期イヤハヤぼ座のさめる譯で是を思ふと先度の議會で君の禁止説の成

り立なかつたのが恨めしい位あるんです「夫といふも畢竟まだ時期が至らぬからの事として又何ともあし難しサ夫にさうと君にいつの間に代議士にあつたか君子に豹變すと云へ餘りに豹變過るちやないかと云れて左馬四郎に挨拶に困りしが此奴元來人を人とも思はぬ者にて生れ以來恥といふものかいた事なく殊に伊具野を田舍紳士とみくびりあまく見て居れば一向平氣にて口尾敲が宇和佐伯爵の推擧にて官吏になりたれば其補欠員に擧られた旨を簡單に陳べ自分も當分此方に居る積りゆゑお邪魔で無くばをり〳〵參り侍高説を窺ひたう存じます「滯在中に例のうわ印の處にお出ですか「イヤとんだ……あの方に奇麗サッパリサ「あんまり左樣でもあるまい

第二回

新宿停車場最寄の一構小高き土堤の上に皂角の生墻を以て四方を繞らし黑の衡門いかめしく門内の庭園廣濶にして樹木しげり玄關前に圓形の壇ありて蘇鉄數株を植え庭の周圍に錦倉檜葉を植連ね通路に玉川砂利を敷詰めたり是あん宇和佐伯爵の別邸にして在京の上下兩院の議員其他知己の人々をこゝに招きがヽデンパーチーを開かれしなり門の内外に黑塗の人力車馬車にて埋り後れて來る者に車の置き場所に困る程あるを見ても當日の盛會を察し得べきあり伯爵に令夫人と共に來賓を迎へ一々握手の禮を行ひ慇懃に待遇し奥庭に通せばこゝに芝生の廣場ありて數百の椅子を配置し所々に涼臺の如きものあり

て來賓の憩ふよ便あらしむ此日集りし人々ん大方皆知已のみあれば三々五々相伴ひ園中を逍遥しつゝ話すを聞け「今日の宴會ん會主のお顔がよい丈よ大分集つたあァ「さうサ奇麗首もチラホラ見える樣だぜ「併し此頃のやうよ宴會が續いてん實よ草臥れるよ「夫も大したほど馳走でもあれべよいが何時も極りのソップ叔の立食で然もビーアばかりとん恐れるねエ適よ葡萄酒が出るかと思へばレモンの皮を刻み込み玉川澤山のポンチを飲せられ腹のだぶつくよん猶恐る夫もさうだらうサ此人數でんザット積つても四五百人ん居るものを一々箸紙付の膳を据ちや夫こう大變だら第一懷合がねエ「オイ君一寸向ふを見賜へ洋服を着て主人公の妻君と話して居るのねありやアシンガーだ

世「何處の「新橋のサ「成ほど左樣いへば見た顔だ「あれん日吉町のうわ吉だが未だ外よも四五名新べし猫が來て居るやうだ「夫ん怪しからんあァ我々紳士の宴會よシンガーの陪席とん伯爵の寸法よも似合あいちやないか「まかし先でん我と都人士の集會よ芋堀紳士のに陪席ん恐れると云て居るかも知れあい「尤もさう云れても仕方がない眞よ芋堀が多いものを「田舍で十五圓の直稅を納める者ん官吏よ非されば芋堀、芋堀よ非されば代言新聞記者位よて中よん不動產の無いのを苦しがり名べかりの財產家が幾らもあつて到底八百圓といふ年俸を當よ奔走した議員が幾らもあるやうだが其樣あ連中ハヤットの思ひで選擧され八百圓の年俸よん有付いたが交際が張り掛り負のするのよ驚い

で居る者も有るだらう「有る處か現ふ我輩の縣から出た伊具野廉太おどゝ其玉サ「伊具野とゝ例の藝妓禁止一件で失敗した「さうサあの伊具野ゝ根からの百姓よて文字などのある奴ぢやあいが無神經の飛上り者よて遠慮といふ事を知らあい奴ゆゑ壯士騒ぎ以來四方八方騒ぎ廻りとう〳〵騒ぎ當て衆議院の代議士といい驚くぢやあいか「併し彼奴も村よ居て先祖傳來の農業を守つて居れば無事だが東京などへ泳ぎ出し紳士ぶつて居たら長持ゝあるまい「長持ゝとてろか現在もう頗る財政困難のやうすにて旅宿の勘定さへ差支へ夫が爲め騎國も出來兼ね止を得ず滯京して居るとの風聞だ「さう云ゝあまし社會よ泳ぎ出した爲め可惜身代をはたいた連中が幾らもあつて伊具野ゝかりにゝ限らぬ

サ「さうかと思へゝ狡猾な奴ゝ代議士といふ肩書を利用して工面を直し財産を拵らへた者もある樣子だ「口尾敲の補欠よ選らばれた鳥賊左馬四郎おどゝ財産を拵へた方だら「鳥賊か皮奴ゝひどいサ議會あらしの洋服ゴロッキといふゝ彼奴の事だ「あぜ「なぜッて彼奴のゝ肩書を利用しよといふンでゝ無く寧ろ濫用するんだものを「左樣かねエ「君おんぞも迂乎して居るどやられるぜ「シテどんな手段で「其手段よ至つてゝいろ〳〵あるが先づ彼奴の最も得意とする處ゝ花サ夫に彼奴ゝ先刻ありこよ居た浮吉といふ婆藝妓を手に入れ其藝妓と内々云合せ時としてゝ柳澤流の賄賂手段で麻睡させ又ゝいかさまで押倒す事おどもあつて實よ恐しい奴サ鳥賊左馬四郎とゝよく付た「誰か其いかさま

よ引掛った者が有るかねエ「有るとも〳〵先づ第一よ伊具野がやられ高うい云れぬがこゝの主人公なども内々鳥賊とうわ吉の爲よ深い處へやられ今の妻君を引せる時なども鳥賊い與かつて力ありサしかし伯も内々い氣付て居るだらう「處がそこが伯爵の伯爵たる處で其樣な内幕い露いさゝかも御存じなく現よ今日の宴會あどい鳥賊がいろ〳〵周旋し其緣でうわ吉の連中がやつて來たのよ相違あいと話し半よドーンと一發打上げ烟火「オヤ吃驚したと仰向いて見て居る處へ當日の周旋人の記者よ作花を胸よ挿した男が來りた「サア諸君食室へお出下さいませ

第三回

てゝよ又此日の宴會よ呼れたる宇崎羽根助と云る一人の少年紳士ありけりこも又其地方の代議士よして父の代ゟでいチゲチーブ的の經濟を主とし何百枚といふ地券を所有し有り餘るよ係らず溜る一方あれゞ家產い年一年よ增殖するばかり日本のワンターピルト若くいロルスチャイルドとある事遠きよ非ざりしよ一年防海費獻金の事ありて當代の主人羽根助が縣知事の勸告よ依り一万圓餘の獻納金をしたる件を以て從五位よ叙せられたるより羽根助の喜悦斜めならず知事公も從五位予も從五位郡長い從七位さて〳〵我ながら冥加よ餘る幸福かな先祖代々の系圖をくり廣げても位記を拜領したる者あしと此點よりして急よ潛上の心生じ夫ゟでい拾ひ乘りの車も直切ちゝよ乘つた事あきを東京銀座の秋葉大助へ黑塗定紋付の車を注

文し車夫を抱へて用もあき縣廳へ出頭するあど抱腹の事のみ多かりしよ無智文盲の百姓共從五位といふ肩書と擧動の華美活潑あるよ眼眩み縣會議員よ擧たるさへ大間違の沙汰あるよ一國の政事を議する代議士よまで推したるいさても世の中い玄關よあるものかあ皮相の美よ恍るゝものかなと密よ長大息をなしたる古老もありしとなん羽根助い意氣揚々く位い從五位官い……職い代議士天下の壯快何事か之よ如んと一層驕奢に輪を掛て初度の代議士徵集に應じ出京したる限り閉會後も歸村せず他の代議士い衆議院よ出頭するよ人力車でも無からうと神田淡路町邊よ出來たる貸馬車會社の上等馬車一輛を數人よて借り込み目白鳥の押くら見るやうよ五六名一途に乘て出頭すれ

を金滿家の羽根助い三百金餘りの二頭引上等馬車を買入れ馭者よ高帽子被らせ護衛巡査を斷りし大臣かと怪まるゝばかりあれば議會の腕前い知らねど定めて金滿の人ならんと宴會の席あどでい襟元よ着く藝妓共の寄依淺からず同僚の内よも紹介を求めて知己とならん事を願ふ者い多かりけり人を見るよ鋭敏なる烏賊左馬四郎い早くも羽根助のはねたる性質を同察し寄貨居くべしとしば〳〵其旅宿を訪問して懇信を通じ此日も左馬四郎が紹介して主人公と相知しめたるが多數の來賓蝟集して閑談の暇あければ苦しからずば跡よ殘り給いるべし衆賓散じたる後緩々高論を窺ひたしその事よ羽根助い委細承知せりと園遊會の時間果たる後も猶園内を逍遙して歸らず頓て夜

より入りたれば伯爵の左馬四郎等を始め何れも内輪の者のみ數十名を更より樓上の一室より招じこゝよて又盛宴を張りうわ吉連中の洋服打扮の窮屈をやめ例の藝妓姿よてお酌を爲し互より胸襟を披き膝を崩し箝を外したる無禮講より羽根助のいつより無く酩酊し左馬四郎が興より乘じ我面白の義太夫を語り居る間よッと下座敷へ引下り醉を發して居る處へ女中が來て床を敷き蚊張をつり呉たれば其中より轉がり居たるより程なく二階の宴も果て邸の近きの歸るもありて靜よなりし頃左馬四郎も下り來りて羽根助と一つ蚊張より入り宇崎君最うお休みですかお先へ免を蒙りました別品のお酌でえらくたべ醉ましたから「オヤ〳〵夫ぢや僕の義太夫のお聞よなりませんでしたか」「始めのうち少々ばかり拜聽致したが何よも苦しくて堪れぬから夫の近頃惜しいことで有た越路全出しといふ義太夫で有たものを「併し窺ぬ方が無事で有たかも知ない」「まア其樣なものサ時より今夜の泊り客が急より多く成たもんだから夜具あどが間より合ずこんお疎末あのをお着せやて濟あいと主人も左樣やて居ましたとの出任のお世辭と知ねばイエ何致して貴君の御周旋よて伯爵とも知已よあり今夜の如き内々の宴會よまで列りしの滿足の至りですと寐あがら話して居る折柄廊下傳ひよ何者か忍び足よて來る者ありへテ今時分誰だらうと左馬四郎の頭を擡げ蚊張の外なる行燈の光よすかし見れば寐衣姿の女おればさてゝ此家の女中の内より已か羽根助を見初め夜這とゝ有難しと物よ動せぬ横着者

も戀よは朐も騷がれてドキ〳〵するを押鎭めよく〳〵見れば うわ吉なり

第四回

左馬「オヤうわ吉ぢやあいか　うわ「靜よおしよ　左馬「だつて何しよ來たのうわ「實いねかう云ふ譯サ今夜私達は裏の離れ家よ寢る筈て床も蚊帳もチヤンと來て居た處急よお泊のお客さんが殖たつて蚊帳を持て行るあぞい情ないちやあいか小ぶちや三毛吉い若いから蚊よ喰れるのも何も知ず横よあると直よ高鼾ゆゑ搆はあいが私とどら助さんいお年のせいと見え綿の股引をはいた大きあ敷蚊が來てチクリ〳〵さす上小豆ほどある大蚤が頻りと加勢す」るもんだから寢られゝばこうそこでソッと忍んで來たの

左馬さん後生だから裾の方でもいゝからもぐらせてお呉あ　左馬「お氣の毒だがいけないねエ　うわ「あぜ　左馬「もつと若い別嬪なら詮議の次第もあるが　うわ「オヤ呆れた其方い此方で畏平だ　左馬「夫あら來ずともの事だ　うわ「分らない人だねエ蚊よ賣られて寢られぬから來たンぢやあいかと問答の處へどら助小ぶち三毛吉の三人とも押こみ來てオヤ姉さんなぜ入らあいのサアお入りよと突然蚊帳の中へ潜り込むよ左馬四郎い驚き　左馬「これい怪しからんお前達い何處の國の人ぢや　どら「アイサ私い唐の天竺横町うそ八百番地阿波の十郎兵衛の娘つると申します　左馬「じやうだんぢやねエこゝよお客人が寢て入つしやるよ無作法極る」此勢よ乘じうわ吉も同じくもぐり込み

うわ「サアもう誰か何と云っても夜の明るまでハ此蚊帳を出やアしない　左馬「さる度胸をすゑられちやア閉口の外あしたゞ」最前より默つて此問答を聞て居た羽根助ハ頭をもたげ　羽根「一人と一人なら相談もあるが、かう大勢で押掛られてハ手よおへねエ何しろ暑くて寐られぬから起きて一服やらかすべい　うら「濟ませんねエ擅那堪忍して頂戴よ其代り是から面白い事をしてお目よ掛ますから　左馬「面白い事とは何をするのうわ「どうせ此人數で寢る譯よハ行あいから一件を始めやうかと思うて　左馬「一件とハうわ「家根屋さ　左馬「夫ハいよ〳〵怪しからぬ苟も衆議院の代議士なる者の寢所へ夜中押込むさへ不禮千萬なるよ花おぞを持參するとハ以ての外だ　どら「其代議士なる者が仲間よ入て呉なぞとハあほ〳〵怪しからぬ　左馬「誰が入て呉と云ふものか、君どうです此無作法加減ハ　羽根「花ハ僕も此ごろ頭りよ研窮中だが大分上達しましたどら「それハ寛あさい尤も左馬擅那のやうあ下手くそを捕へるのハ氣の毒だ　左馬「なに下手くそだ左樣いうお前こそ此間十圓ばかり負たつて泣た癖よ　うわ「うんあ事ハ宜いからお休みあさいヨー此方ハ此方其方ハ其方だから　左馬「イヤ左樣ハ行ぬテラ稅を取ねば成らぬ　うわ「博奕でもうちやアしまいしテラあぞと人間の惡いと云あがらランプと引寄せ始め掛るを見て左馬四郎も起直り見て居りしが頗て同人も加り頻りよ面白さうな樣子を見て羽根助も起き出で是も同じく其中へ加り三人つゝ二組となり鼻の

穴より油烟の溜るも知らず夢中にあつて爭へり元來此羽根助いお坊さん育ちの上ポット出の椋鳥にて國にゐる間い花あど手掛た事い更になかりしが代議士となりて出京以來先づ第一に藝妓買ふ事を覺え夫までい女買と云へば娼妓に限ると思つて居たい我あがら迂遠なりし事を知り次に玉突を覺えしが是まで田舍に居る間い嘗て見たる事もなかりしに斯樣に慰みを研窮したるも代議士に成たお蔭と悦びぬ左れど堂々たる紳士がめくりちらぽへに均しき花合を弄ぶとい夢にも知ざりしにさて〳〵東京と云ふ處は怪しからぬと最初い頻りにけおして居たがおひ〳〵交際社會に出で紳士附合をして見ると是また研窮せざるべからざる要具にして寧ろ圍碁い心得ぬまでも花の引方を知らぬやうでいと根が羽根助のはねて居る丈に無暗と極端に走りたかり急稽古の下手くりの癖に彼方此方の催しに加り手をやくこと毎々あれど素より慰みの勝負事あれば大した傷手も負ず今宵も負通した處が五圓か十圓と高を括り居たるに左馬四郎い兼て此道の老練家にて其名におへるいかさま師まれぱうわ吉と課し合せ体よく羽根助をいかさまに引掛け引明までにい五十圓ほど奪ひ取りぬ左れど羽根助い左のみ驚いた顏もせず何れ近日例の家にて今夜の仇をうつからと笑ひながら金を渡して其場い濟せり

第五回

人い經驗に依りて持論の變る事往々あるものにて衆議院

開會までは熱心に藝妓廢止論を主張したる伊具野廉太も持説行はれずして失敗したるに我を折しのみならず滯京中密に經驗したることある趣きにて今は頻りに前説の非なるを悟り藝妓を文字上より解釋して藝を賣る者とのみ心得たる淺見を恥るに至り次回より更に前論を轉じて藝妓の必要を説き藝妓の宴席上欠へからざるのみならず閨房中また之なきを得ざる緊要物たり故に寧ろ娼妓を廢するも藝妓を廢すべからず宜く藝妓に對し充分の保護を與へ娼妓と同じく公然賣淫を許可し其營業税を全免し娼妓に禁止税を課し其重きに堪ざらしむるとせば漸々娼妓の數を減じ遂に其跡を絶つに至るべしとの新説を提出し議員大多數の賛成を得て先度の失敗を回復すべしとの意

見を懐き議院の開會前より其事を知己の人々に吹聽し同意賛成を得んと勉めたり左れど心ある人々は此馬鹿らしき意見を斥け取合ふ者なきも盲千人の世の中とて中には伊具野の説を理ありとし賛成する新聞紙などありて續々紙上に掲載し伊具野の説に同して果して第二次衆議院の議場に提出するに至らば必らず滿場の賛成を得て無事經過するに至るべしと批評めきたる記者の附言さへあるを見て吉原洲崎は勿論四宿其他全國の貸座敷連中は常非に氣を揉み各地方より委員を派出し歎願書を出すとか建白するとか數度大集會を催し其豫防策と講ずる等事の成否は兎に角此度は伊具野の説非常に氣を持ち其名を全國に知らるゝに至れり左らぬだに風塵鶴唳に驚く遊廓の聽病

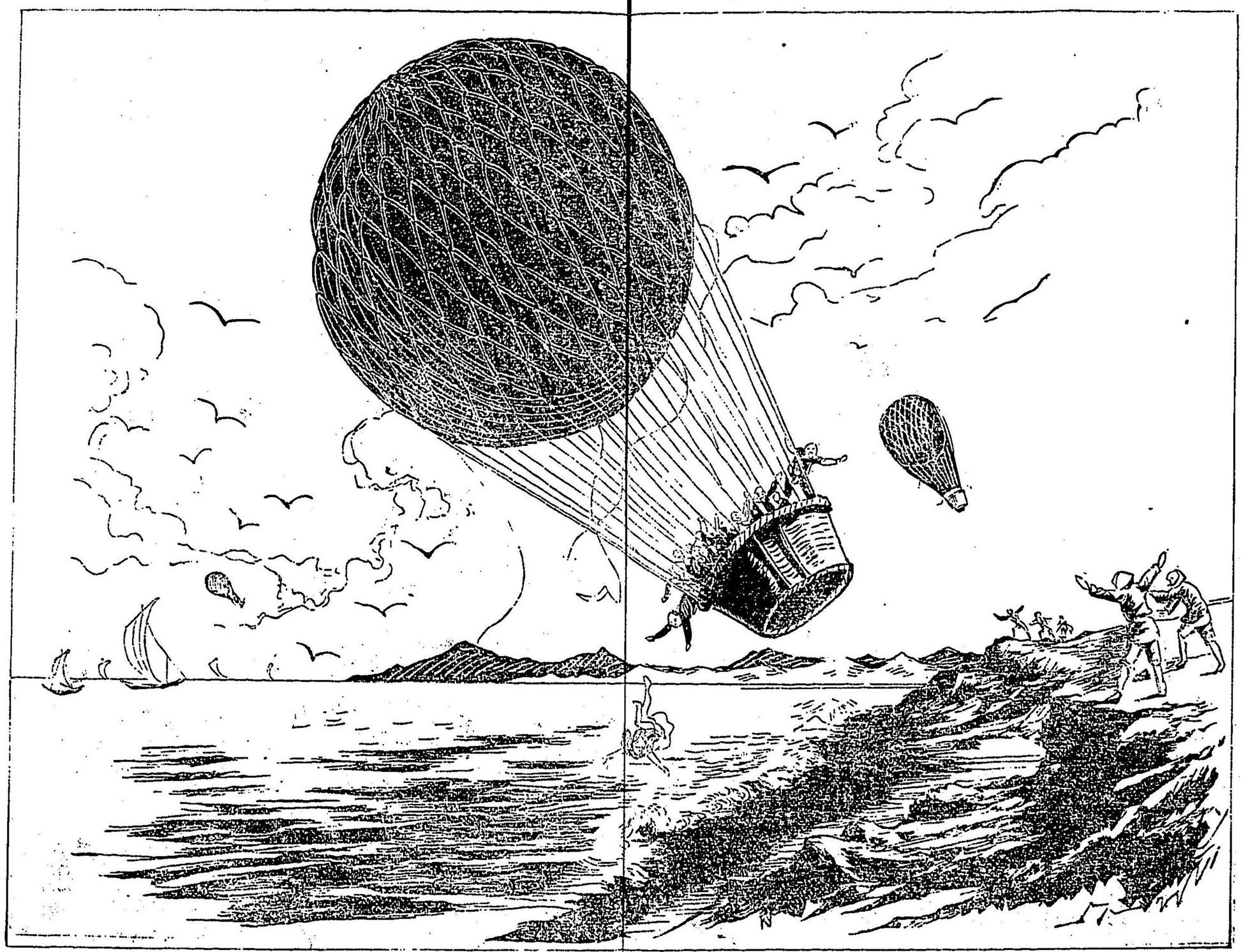
連れ何ある事かと心も空にして帳場の用も手に附ず金で防がれる事あら五万でも十万でも構はぬが先年のやうに又露れ金を莫大取られた上僞證罪の何のと拘留あどされるやうな事が有ては埋らぬからと青くなつて立騒げどさて宜い工夫もあくに頭を痛ましぬ左れば娼妓等も此噂を聞かぢり共に心配する中に愛知縣名古屋の新地に求馬といへる娼妓ありて絶世の美人ある上肌に慊慨の氣節あり自由説を主張し娼妓に素と前借金をして貸座敷に出稼する者なれば樓主に壓制さるゝ筈なし然るを強て娼妓を奴隷視し壓制するに於ては一同申合せ休業をするの外なしと美しい顔に似合ず手強い事ばかり云て樓主を困らすれと却つて夫が呼び物になり自由娼妓の仇名を得て名差

で上る客多く其店での玉頭なれば樓主も爲に一目置き何を云ても無理は尤もと体よくあしらひ犬の糞のない處へツツリして置くよりまし〳〵圖に乘り通俗佛國革命史あどといふ新板物を取寄せルーソーの民約論を批評したるあどなか〳〵の丈夫とありしが今度伊具野廉太と云ふ代議士が先に藝妓廢止論を唱へて置きながら其説の行はれざりし腹癒に今度は引くり返つて藝妓保護説を主張し其餘波が娼妓の頭へ及びしとはさて〳〵怪しからぬ奴あか左樣な節操に乏い輩が議院にありても今後また何なる戯言を吐き議院を騒がす國是を誤るも知れねば妾に暫時の暇を給はらば出京して其代議士に面會し爲す處あるべしとの事に樓主に同人の日頃の氣質を知て居れば萬

一早まつた事を仕出來し毛を吹て疵を求めるやうな事が有てはならずといろ〳〵云宥めたれど聞入ず是非よといふよ止むを得ず同地の取締とも相談しいよ〳〵出京を許す事よりて其趣きを東京吉原へ電報し本人出京の上は精々は心添を願ひたし左れど事の成るまでは隨分い秘密を要する趣きなれば他へ漏さるやう注意を願ひたしと云送りしに吉原よてい委細承知せりとて求馬の出京を待受たり

第六回

佛蘭西の學者ラマルチンが自由のジャンダークシ、名けたる少女カルロット、コルデ｜が其年紀廿五歳容姿頗る美あるよも拘らず纖手を以て革命黨の有力者マ｜ラ｜を刺し



其身を犧牲に供したる事を記臆したる者ハ求馬の出京を以てコルデー娘の巴里行に比し密に其結果を危ふみたるも多かりしに求馬はありていハ更に其樣子なく出京後ハ紳士某の別莊あり根岸の閑雅なる家に滯在し毎日美に美を盡して造り立て常雇の車夫を置きて高臺の奏任車に乘り上野公園向島人の出盛る處のみ選びて遊び廻り折節ハなくつけき男のみ集る演說會などを聞きに行き慷慨悲憤の說ある毎に他の聽衆と共に拍手喝采するを見て辯士ハ勿論聽衆に於ても深く目を注ぎ頻りに評判し果ハ此美婦人を見る爲め演說會に行く者はへ多かりしが求だ知己となりて語らひし者あるを聞ず然るに代議士中のチョビ助と評判ある烏賊左馬四郎が早くも之を聞き傳へを求めて知己と

なりいろ〳〵と此女の素性を探りしよ愛知縣の或る豪家の令娘よして一度他へ縁付たるも其夫い頑固なる保守黨員よして到底政友とするよ足らずと離別を請ひて出京し衆議院の代議士中自由黨出身の人を選び夫婦の契約を結びたく婚禮の上い三万圓の財産を持參して衣食其他とも一切夫の世話よあらず純然たる男女同權を維持したき心願なりとの事よさすがの左馬四郎も其立派なる希望よ驚歎し到底我輩の企て及ぶ處よ非ずと手を引たり爾來一層此婦人の評判を高くし東京の各新聞紙い此婦人と知己よある者のある毎よ其姓名を紙上よ掲ぐるよ至りしが未だ誰あり て特別の情交を結びし者おく中原の鹿果して誰の手よ落るか其艶聞こそ聞かずまほしけれと評判とり〳〵の

折から不可思議よも其艶福い衆議院よて藝妓全廢説を提出して失敗したる伊具野廉太よ歸したりと云ふい全く實説の如く廉太い折節新坂の温泉等へ出掛け夫まで熱心よ主張したる藝妓保護論も減切と下火よあり適之を難問する者あるも曖昧よ答へ甚だ冷淡よありぬ左れど男子たる者があれ程よ主張したる説を今更立消よも成るまじ次回の衆議院開場も近きよあれば其節い是非提出するよ相違あしと藝妓連中い其人を知る知ぬよ係らず非常の熱心よて待暮したる甲斐もなく一日の各新聞紙廣告欄内よ伊具野廉太が二號文字よて自分儀是まで藝妓保護論を主張したるも聊か感ずる處ありて今般斷然該説を取消し衆議院よ提出の儀思ひ止り候云〻と廣告したるを見て落膽す

るもあり悅ぶもあり又中より代議士とも云るべき者がかく毎々く持論を變ずるとゝ何事ぞ是よゝ何か仔細あるべし嚴しく詰問の上答辨の摸樣よ依りてゝ辭職を勸告すべしゑど罵る輩もありしか或る一部の人ゝ必定貸座敷連中より鑛物製のモルヒネを唄せられ爲よ麗睡せしものゝらんと冷評せり左れど此評ゝ當らず貸座敷よ於てゝ毛頭左る事なしと判然し他よ據るべきの說なきを怪む打拵或る反對黨の新聞紙ゝ一大怪報を傳へたり其報よ據れば伊具野が情交を通じたる根岸の婦人ゝ愛知縣名古屋の唱妓よして其名を求馬と呼び豫て自由說を主張したる稀有の婦人ゝ付てゝ其影響りしが今度伊具野が藝妓保護を主張たるよ付て全國の貸座敷よ及び少なからざる損害を蒙むる趣きを聞き一身を賭して此災厄を救はんと過日來出京中伊具野よ

眠入り首尾よく籠絡したるも伊具野よ於てゝ持說を取消すの摸樣あければ一夜閨中よて短刀を拔き持說を念ひ止らずゝ斯と强迫手段を用ひ遂よ伊具野をして取消文を廣告するよ至らしめたり尤も其强迫手段ゝ伊具野を刺んとしたるか自ら死んとしたるか文明ならず云々此一項は大いよ世人の注目する處とありて伊具野ゝ頓よ名聲を失ひ再び社會よ立つ事能ずして遂よ辭職して歸國したる後よ何よ為りしか知る者なし

第七回

かくてまた宇崎羽根助ゝ宇和佐伯爵の別莊よ泊りし夜花合せよ手を燒きし後ゝ生兵法の大疵の元ある事を知り再

び花札を手よ取らず玉突も金を賭てゝ一切せざるよ左馬四郎ゝ失望し田舎のデモゝ話せぬと呟き居たりしが猶一つの望みゝ兼て羽根助が女よのろく出京以來戯妓買の味を覺え無駄金を費する樣子を承知してゐれば其虚よ附入り今一度法を曹きどち道費る金あらば此方へ巻上たいもの と堂〻たる代議士の職を負あがらもぐり代言か何ぞの樣よ卑劣あるいかさま事のみよ氣を入れ内〻うわ吉と相談を遂げ羽根助の取巻同樣に成てあちこち引廻し其間ようまし太鼓をたゝきどう〳〵三毛吉を押付たるよ同人ゝうわ吉より万〻吹込んであれば娼妓も及ばぬ程よべたつき偏よ羽根助の鼻毛をよむよ掛てゐれば唯さへのろい羽根助がいつそデレ〳〵よなり築地邊よ小じんまりとした別

宅を拵へ三毛吉を引せて權の字とするまでよゝ非常の金を使ひたるが是皆左馬四郎のさし金よて此上長く滯京したらば何かる目よあふか知ず左馬四郎の如きゝ同僚を賣りて私利を營む曲者よて實よ代議士の風上よも置れぬ奴ちや我〻ゝあの樣よ姦佞と伍を同じくするを恥ると心ある者ゝ爪彈して其所業を非難せり左れど羽根助ゝ猶之を悟らざるか相變らず左馬四郎を近づけ二あき者と親しみ居るを見て苦〻しき事よ思ひ密よ忠告する者もありしが用ひず却て左馬四郎を執事の如く顧問の如く何事も同人の意見を用て決行する事よして居るをよい事よして種〻と不利益の事のみ進め總休田舎から出る代議士ゝチョビ助のばね上りが多く代議士たるの資格も多くゝ拵へもの

よて實際十五圓以上の直税を納めるゝ稱なり夫ゆゑ出京しても入費の掛るを悲んで長く滯在ゝ仕得ずお仕着せの旅費を幾らかけ出す位の心得よて議會が了ると直に歸るゆゑ東京紳士の情況を知す代議士の名譽職あるを思はずして八百圓の給料を取る準官員位よ心得て居る樣子なれど夫から見と君あどは大したものだ根が地方の豪家ほどありて東京紳士も及ばぬ程の寛濶あるお暮しよて更よ非難を試むる處よてしかし君も慢承知の通り東京紳士もピンから切まで有て一樣よゝ云れぬが當時先づ府下での風指い澁澤大倉益田あどだが此手合ゝ皆實業專務の商法家よて少し大きな商法をするよゝ此手合の名前を借り協議人とう贊成者とかなければ人氣が寄らず株と募つても應じる者がないとゝすぐらしいものぢやありませんか處で自分の考へにゝ貴君も久しく東京よ御滯在よておひ〳〵上等紳士との交際も廣くなるよ付てゝ先祖傳來の財産を空く使ひ減さんよりゝ何か一大事業を企て右の大頭連中を四五名生捕り百万以上の資本を募り大掛りよ儲ける工夫をしてゝ何だ若しお氣があらゞ及ずながら自分も一肇の力を凝し斃れて後止まんといふ氣組で盡力致すがと見込んだ山でもあるやうよ云へば羽根助も乘地よあり實ゝ僕も疾うから其氣ゝ付て居るが大概の會社ゝ最早起し盡し高架鐵道電氣馬車其樣あ古手あ計畫でゝあか〳〵人氣ゝよるまいと躊躇して居たが何か儲りさうな工夫がありますかありますか處か金を儲るのゝ是からです第一市區

改正といふえら物のある上品川灣埋立の大工事併し是等ハ平凡の者よも氣が付きいよ〳〵埋立工事の入札とか埋立地拂下とかいふ一段よあると無茶苦茶よ祈り上げ人參呑んで首縊るやうお騒ぎが出來するで有らうから夫等の事ハ殆く他人よ任せてしよ未だ誰も氣の付かぬ儲口といふハ風船旅行會社の設立です風船で旅行の出來る事ハ佛蘭西のヲウルスルベルヲといふ人が書いた世界一周といふ小説よもありて佛蘭西戰爭の時よも風船よ乘つて敵軍の布陣を見下したといふ事あれば此風船で旅客を運搬する事よすれば鉄道を布くにも蒸瀛をたくよも及ばず甚だ簡便よして利益多きハ他よ比較すべきもの無く實よ有益の會社だと思ひますとの説よ羽根助ハ頻りに其名説よ服し

早速會社設立を企つべしと決心し左馬四郎を理學士某氏の許へ走せて相談せしめたるに理學士もいけないと云切るもいかゞと思ひしか曖昧よ答へいよ〳〵其計畫を實行たるに丁簡あらぬ然るべき外國博士を顧問よ雇ひ萬事の相談を爲されたら宜らうと云れ成ほど是ハ最もある説なり併し風船會社を立るから雇ひたつなぞと公言する時ハ忽ち四方へ傳播して類似症の起る虞あれば夫とおく風船の事よ明るき外國人を一人雇ひたいと諸方を奔走するち横濱よゐる獨逸人よ一人理學博士の學位を帶び風船學よ明るき者のある由を聞き早速其者よ面會し會社創立を了るまで凡そ一ヶ年金三千圓といふ契約よて其博士を聘し頓て規則案も出來て其筋へ創立許可を出願したり

此出願と共に株金の募集に掛りたるに株式熟に浮かされ血眼になり居たる連中に其利害を深くも窮めず風船會社と云ふ面白しと株主を申込む者意外に多く忽ち滿數とありたり勿論資本金百萬圓のうち五十万圓に發起人にて負擔し跡五十萬だけを廣く公衆より募るとの事なりしが內實發起人に一文も出さず他の株金だけで間に合せ人の憤鼻輝で相撲を取る考へなりしが是皆左馬四郎の考按に出で羽根助に殿樣然として濟して居る間にお膳立調ひ其筋の許可もありて本局を東京汐留支局を横濱に置く事に成て盛んに風船の製造に着手し準備の調ひ次第開業式執行との事にて其前に數度風船の飛揚を試みたるに意外の好結果を得たるより是おらぶ差支なしと開業式の當日には貴顯紳士を招待し余興には烟花をうち上るといふ處なるが風船だけに彈丸を持て上り船の中より投り出すと中途で破裂するといふ新趣向うち上なしの烟火とは新しいが音がしあくて間が拔るとの評もありしが兎に角大盛會にして其翌日より營業を始める事にありぬさて往復の場所には何處から何處まで と豫め定め置ねば賃錢を取るに不都合ありと是まで左馬四郎の考按にて新橋及び上野の鉄道線路に添ひ瀛車瀛船の行く處には何處にても行き賃錢は都て瀛車瀛船の半額と定めしに何がさて珍しきを好む人の情殊に半額といふがきゝしものか非常に乘客多く開業の當座は臨時風船とせられば乘り餘るほどの景氣ありし然

るよ梶取の不熟練あるが爲めか風船の不完全の處あるか少し風の強き日ハ思つた方角よ進まず仙臺までといふ乘客を青森まで連れ越し又ハ京都へ行くべきを途中より吹返されて新潟へ着く事あゞ折々ありて忽ち世人の信用を失ひ乘客の減ずるよ社長宇崎を始め副社長烏賊其他の役員も頻りよ心配して居る處へ紀州和歌山よりの電報よ昨日野州宇都の宮を出て函館へ向け通行したる風船暴風の爲め當地よ吹飛され遂よ海中へ落たるも乘組員の盡力よて人命よハ恙なく一同無事上陸せりとありまよいよ〳〵驚きしが此事早くも新聞紙の傳ふる處とありて次の日よりハ一人も乘人なく忽ち閉社するよ及びたり株主等ハ之を聞き日々會社よ押掛け損するまでも幾らか割戻を取ら

んと役員に對つて激論すれどもなか〳〵割戻し處でハ無く殊よれば尚幾らか徵集して買掛りを濟せねばならぬと左馬四郎の挨拶よ一同呆れ役員の外手を着るべからずとして有た帳簿を取出させたん〳〵吟味よ及びたるよ發起人よて五十萬圓負擔するといふハ虛の皮よて實ハ一文も出て居らぬ事が明白した株主の激昂ハいよ〳〵烈しく社長副社長を相手取り詐欺の告訴をすると立騷ぐを仲裁人が入りて株主を宥め到底かゝる山業よ掛つたが株主の誤りまた宇崎社長よ於ても此損害を他人よのみ押付けノホンで濟さんとハ虫のよい話しなり兎角ハ應分の損害を負擔し乘と共よ苦しむこう社長たる者の責任なれとの說よ服し今ハ止を得ず宇崎も二三萬の金を持出してやつと

帳尻のくゝりを付け無事よ解散したり此大痛事よ宇崎も遂よ馬脚を顯はし國許の財産ハ大方八手よ渡し今ハ全く手ぶり編笠國會議員の資格を失ひ辞職までも無く自然と消滅したれば東京よ居るハ後めたく思へど左りとて國へ歸るハ猶恥しく進退こゝよ谷つて青く成て居るうち左馬四郎も借金よ責立られ東京よ居る事のならぬ苦し紛れ行掛の駄賃よ三毛吉を誘かし二人で何處へか身を隱したるよ宇崎ハちだんだ踏んで其人外ある仕方を怒りうわ吉を責むれど同人ハ却つて二人の騙落したる由を聞きよチン〳〵筋で居る處あれば宇崎よ對ひ其扱りを責めあべてよ苦情いふ勢ならず我を折り始めて東京ハ生馬の目をぬく恐しい處なる事を知り一升袋は一升といふ原則を守り田舎よ引込んで居ればてんゐ目よハ合ぬものをと今更ナヨキがゝりはね廻りしを悔み築地の家を仕舞ひ夜行瀛車の下等よ乘つてコソ〳〵と歸縣したる後は新籍何の某方厄介從五位……

よもや双紙終

明治廿三年二月廿三日印刷
明治廿三年二月廿[redacted]日出版

版權登録

編輯兼發行者　金子[redacted]
日本橋區元大工町拾五番地

印刷者　瀧川三代太郎
日本橋區新泉町一番地

發賣所　金櫻堂
日本橋區通四丁目四番地

よもやま草紙

版權所有